

布教資料 第6集

# 現代教化の視点

—各世代に焦点をあてて—

- |                |       |
|----------------|-------|
| ○ 青年の教化        | 長谷川良昭 |
| ○ 思春期の心理と宗教の役割 | 大村彰道  |
| ○ 女性と宗教        | 場知賀礼文 |
| ○ 現代人教化の可能性    | 飯田順雅  |



浄土宗総合研究所



布教資料 第6集

# 現代教化の視点

—各世代に焦点をあてて—

— 目 次 —

青年の教化	長谷川 良 昭 ( 1)
思春期の心理と宗教の役割	大 村 彰 道 ( 39)
女性と宗教	場知賀 礼 文 ( 87)
現代人教化の可能性	飯 田 順 雅 (107)
あ と が き	(131)

浄土宗総合研究所



青年の教化——教育の現場から——

大乘淑徳学園 理事長 長谷川良昭

今日は「青年の教化——教育の現場から」という大変難しいテーマをいただき、私のようなものでよろしいのかと、本当に恐れ入っております。

私は浄土宗の僧侶であります。日ごろは今、ご紹介の大乗淑徳学園の学校経営の方ばかりやっております。教化の方はと申しますと、かつてブラジルで四年間ほどお寺に務めていたこともあります。現在ではほとんど学校経営にかかりつきりです。この題にふさわしいお話はともできないかと思いますが、私どもの学校教育の経営的側面を感じましたことをお話をさせていただいて、お許しをいただきたいと思います。

### 学校教育の課題と将来 —— 三つの視点から ——

今、世界中が大きく変動しておりますように、学校の方でも幼稚園から大学まで大きく変わってきております。中曾根内閣のときに内閣総理大臣の諮問機関として、臨時教育審議会ができました。これが八七年のたしか十月に最終答申を出しました。それを受け継ぎまして今度は中教審という、文部大臣の諮問機関、それから今、大学の改革をするという大学審議会ができて、ここ三年ほどいろいろ大学問題を審議して、平成三年の五月の

八日に答申が出たわけです。

戦後最大の大改革でして、恐らく、今、どこの大学でも自分の大学をどう生まれ変わらせるか、その「生みの悩み」を持っているところでもあります。しかも、子供の数を今年平成三年の出生数で見ますと百二十二万人でございます。かつて昭和二十二年生まれの子供さんが二百四十九万人でございましたから、半分以下です。平成四年の十八歳人口はそれでも二百六万人でございしますが、これが今年の出生数では百二十二万人というように、子供の減少現象が確実に見られます。したがって、幼稚園から大学までいろいろな改革が今行われているわけです。

とりわけ、世界の大学の中でもわが国の大学は問題があるということ、今まで政府がいろいろ規制してきたのを、これを大幅に緩和する、いわゆる自由化をして、そのかわり自分のところでその責任をとってもらいたいという、政府の方針がありまして、各大学が今血眼になっているようなわけでございます。私も理事長という立場ですが、幼稚園から大学まであります中で、特に大学問題に苦しんでおります。

臨教審がちょうど四年前に最終答申を出しました中で、二十一世紀を目指す日本の教育の課題として三つの視点をとらえております。その第一番目は、「個性重視の原則」とい

うこと。それから、第二は「生涯学習体系への移行」。第三番目に「変化への対応」ということで、国際化、情報化への対応と、この三つが当面二十一世紀を目指す教育の視点としてとらえられておりました、それらが今度の大学審議会にも引き継がれて、いろいろな改革が行われております。高等学校以下の場合には教育過程審議会におきまして、指導要領が十年ごとぐらいに変えられております。高校では平成六年、中学が五年、小学校は四年から新しい指導要領で教育が進められるということでございます。

ちょうど十一年前でございますか、一九八〇年に、私どもの学園の当面の教育の目標を三つ掲げました。一つは「教育の個性化」ということ、二番目が「教育の開放化」、三番目が「教育の国際化」と、この三つの目標を掲げてスタートしたわけでございます。ところがスタートをしましてちょうど七年目の一九八七年に、その臨教審の答申が出まして、これが驚いたことにそっくりなんです。個性重視の原則というのは教育の個性化ということですし、生涯学習体系の移行というのは大学の開放化、教育を開放して社会人などとも一生を通して勉強していくというようなこと、それから国際化、これは文字通り国際化への対応ということで、ちょうど方向が一致しておりました。

そのときに私が感じましたのは、意外ではありませんが、世の中の世論として一つの方向



が出てくるには、各私立学校が一つの方向を決めてスタートさせてから大分遅れてでいく。それでああいう答申が出たということになるんだと思うのです。その点、うちの学園の場合では割合に早くスタートできていたということ、ちょっと安心をしたわけでございます。

さて、そこでこの「教育の個性化」という第一番目の問題でございますが、私どもの学園にかかわらずどの学校でも私立学校の場合には、ご存じのとおり個性化の教育を進めていく基本に建学の精神を据えております。そこには創立者の理想、こういう人を育てたいというような精神があるわけでございまして、これがバックボーンになっていろんな教育が進められている。入学希望者は入学案内に書いてあるその精神を求めて試験を受ける。そうすると学校の方もまたその志願者を選んでお入れする。お入れしますとその精神に沿った教育を先生方がやってくれるわけですけれども、これが本当に学校の教育活動を通して浸透しておりますと、その生徒なり学生が社会に出て實際生活を営むときに、それが行動なり、物の考え方に出てくる。我々はそれを期待しているわけですし、建学の精神を実現できる人間を育てるために私立学校はできたということです。これは私立学校法にも明示されているとおりでございます。

そこで、建学精神というものをじゃ、どういうふうに、学生に理解をさせ、実際の日常生活の中で生かして発揮させればいいのか。最近、世の中がこう変わってまいりますと、旧来の創立者が学校をつくった時代のまま、淑徳ですと百年前と同じような表現をして、それで学生に伝わっていくかというところ、これではなかなかむずかしい面が出てくるわけです。

いろいろな民間企業の社長さんの話を聞いておまして、ひとつおもしろいと思ったのは、学校に建学精神があるように、一般民間企業にもそれぞれの企業理念がある。その理念を背景にして企業の文化が生まれて、企業の経営風土というようなものができているそうです。特に世界で有名になった、いわゆる多国籍企業と言われるところは、組織を支えている相当しっかりした企業理念、経営理念を持っております。

例えばIBMというコンピュータの会社がございますけれども、これを創立したトーマス・ワトソン会長の書いたものを見ましたら、

「企業が生き残るための三つの条件というものがある、第一番目はだれが見てもあの会社は立派なことを言っているという、そういう信条を持っているということがまず大切なんだ。第二番目にどんなことがあってもその信条だけは守り抜くということが大切だと。

そして三番目には、その信条以外のものはいつでも変化に即応して変えていく勇氣を持つことだ」と、こういうことを言っておりました。信条以外のものはいつでもその変化に即応して、変えていく勇氣を持てと、これはなかなかおもしろいことを言っていると感心しました。

企業理念、経営理念というようなものを建学精神におきかえますと、建学精神というのはバックボーン、人間の体に例えるならば、骨格みたいなもので、その外側に肉がついて皮がかぶさって、そこへ血が通っている。そして血や肉や皮はどんどんどん、いつも新陳代謝して取りかえていかなきゃならんけれども、骨組みだけはしっかりと不動、不変のものとして据えておく。そうしなければ会社でも学校でも、生き残っていけないんだということを書いておられるんだと思いました。

そこで、学校も校祖なり学祖が残した教え、その根本精神というものの、骨組みですね、これをしっかりと残しながらその表現の部分、ちょうど血や肉や皮に当たる部分はそのときそのときに応じてどんどん言葉を変えていってもいいんじゃないかと思えます。

昨年ですか、私どもの学園の三つの高校の新生にアンケートをとりました。この学校を選んだ理由を選びなさいと項目を十ばかり並べまして、その中に、建学精神が好きだっ

たという項目も入れておきました。

西巢鴨の大正大学のお隣にございます巢鴨女子商業、今は淑徳巢鴨高校とっておりますが、それと板橋にある淑徳高校とは建学精神が校訓になっております。その校訓を比較してみますとこれがなかなか興味深い。まず、巢鴨の方は校訓三条と言いますが、第一は、生命に対する畏敬の念というか、「敬虔」という言葉、二番目は「奉仕」、三番目は、理にさといといえますか「聡明」という言葉、この三つです。それを淑徳高校の方はよく似ているんですけども、敬虔というようなことをそう言わずに、生命への畏敬の感情を、「生命」として第一に掲げ、それから、二番目の奉仕ということを「愛」。三番目を「自由」とし、物事にとらわれない聡明さといえますか、仏教で言うところと融通無碍ということですか、そういうものを「自由」と表現しております。

その生命、愛、自由というのをさらに英語でライフ、ラブ、リバティーとしまして、Lが三つつくもんですから、校長が校門を入った校舎の正面に英語で大きくライフ、ラブ、リバティーと書いて、三Lの精神と言って、掲げましたところ、ちょうどフランス革命二百周年の年でしたか、私が校庭におりましたら、中学生がやってきまして、「これはフランス革命の精神だ。これはなかなかすばらしい、こういういい学校なら私は入りたい」と

言うのです。そこで、「いやそうじゃない、フランスの方は自由、博愛、平等でちょっと違うけれども、似たようなところがあり、これは仏教の非常に大切な教えなんですよ」と言ったら、「仏教というのはそんな教えですか」と何かしらイメージが湧いたようでしたけれども、実はこれがアンケートの結果、入学理由の第二番目に挙げられている。ですから、こういう精神性のようなもの、校訓でも表現を若い人に親しみやすく変えて伝えてあげるべきなのです。しかも、これは渡辺海旭先生のお考えだったそうで、その先見性に敬服するばかりです。巣鴨の方は長谷川良信先生が考えた。よく似ているんですが、この方はたしか選択理由の九番目ぐらいによく出て来る。我々はむしろライフとか何とか英語で言われるよりも、敬虔とか、奉仕とか、聡明とか漢語で言われるとぴんと来るんですけれども、今の若い人には、三Lの精神とか、ライフ、ラブ、リバティーと、言うとうんと来て、こういう精神の学校なら私も入れていただいて、ひとついろいろ教えてもらおう、そういう意欲を持って入ってくれるわけなのです。

これはやっぱり嗜好が違いますね。我々のように漢語で育った者と横文字文化で育った者の違いが鮮明に出ておまして、ちょうど色の感覚とか、音の感覚、あるいは食べ物味の感覚とかも、我々と若い人とは嗜好が随分違ってしまっている。例えば大豆なら大

豆を原材料として料理するとき、年配の方は昔は煎ったり煮たり、納豆にしたりして食べる。これが非常にうまかったということになる。豆腐にして冷や奴なんかで一杯やれば、我々だったらもうこたえられないぐらいまいわけですけれども、今の若い人に納豆や豆腐にして食べさせてみても余り喜んでは食べてもらえない。ところが極端な話、「豆腐をハンバーガー仕立てにしてアメリカのマクドナルドあたりで売りますと、健康食品として体にもいい上に、今はやりのファッショナルな食物だということ、非常によく売れている」という話を聞いております。若い人は自分の好みのところ売っているものならさっとそこへ行って食べてみる。栄養そのものよりも、そのマクドナルドのハンバーガーを食べるといふことが一つのファッショナルになっているからでしょう。こういうふうな料理の仕方ひとつ取ってみても、我々はやっぱり時代時代にあわせて変えていかないと食べてはもらえない。そういう工夫がないと、これからの若い者に精神的なものを伝えていくということとは非常に難しくなるんじゃないかと、アンケート等から感じたわけでございます。

とにかく、私ども、建学の精神を私立学校における個性重視の考え方の根本に据えておりまして、できるだけそれを実現してくれる若い人たちが育つことを念願しているわけがあります。

第二番目の教育の開放化、これは生涯学習体系の移行ということと関連があります。うちの学園が巢鴨に学校をつくりましたのが大正八年ですから、もう七十二年になります。創立当時地域の方々を学園に集めて、そこへ大正大学から先生方にいらしていただいております。それをユニバーシティ・エクステンション、大学展開事業と訳していただきましたけれども、地域の方に勉強をしていただいた。これは最近オープンカレッジとかエクステンションセンターとかいろいろ称して、あちこちでやっておりますけれども、うちの学園でもちょうど七十年の伝統がありまして、それを今、板橋と巢鴨、それから大宮でやらせていただいておりますが、ここには大変大勢の方が勉強に来られます。その利点は、地域の方々の要望がそのセンターを通して学校の中に入ってまいりますし、また学校の方もそこを通して学校の考え方を地域の方にお伝えしていくことができる。

東京の武蔵野市に亜細亜大学という大学がございまして、衛藤藩吉先生という学長さんは大変おもしろい人で、もとは東大の国際政治の先生だったそうですが、昭和六十二年ですか、請われて亜細亜大学の学長になりました。六十二年の五月に私どもの短期大学のみずほ台キャンパスがNHKテレビに取り上げられましたところ、就任早々にもかかわらず、それを見た翌日、もうみずほ台に来られました。そのとき私は不在だったので

すが、翌年またテレビの密着取材で来られましたので、色々お話しすることができたのですが、その大学からこの三年ほど毎年ご招待をいただいているんです。どういふことかと言いますと、武蔵野市の主な人たちをホテルへ招いて、ごちそうを食べさせるんですね。そして大変気のきいたお土産がついてくる。そういうことを地域の人たちになさる。

勉強ももちろん大事なんですけれども、今日は地域の人に本当にサービスすること、地域の人とのつながりということがその大学の重要な役目になってきている。大学は研究と教育とその地域社会への奉仕という三つの役目があります。どちらかというとドイツの大学は学問の研究で、イギリスは教育で、アメリカは社会奉仕だといわれております。

第3番目は、教育の国際化でございます。国際化、国際化ということが十五年ぐらい前から言われて、このごろは国際という言葉は飽きたから、グローバルイゼーションというんですか、むしろ地球化というようなことを言う方が多いんです。教育の国際化は今日大変重要になっております。実はこれも創立者の長谷川良信先生が昔ブラジルへ参りましたときに、東洋の文化を西洋文化のある南米へ持って行ってドッキングさせて、そこで新しい文化をつくりたいという大きな理想も持っております。

今日では海外に提携校や姉妹校をつくり、いろんなことをいたしておりますが、私が感



じますには、外国を理解するにはまず言葉ができなければならぬということ、イギリスに学校をつくったりいろいろしましたけれども、どうも高校卒業してから外国へ行ったのでは会話はうまくいかない。十年くらい前になりますけれども、ブラジルの開教で知り合った方の娘二人と息子を日本に預かりました。女の子の一人は十二歳で一年半ばかり預かりました日系の二世なんです、日本人と全く同じ日本語をしゃべるんですね。その次の女の子は十七歳、日本で言うと高校二年生で日本へまいりましたが、この子はやっぱりちょっとブラジルのなまりがある。最後に今ボストン大学の大学院に行っている長男を、二十二歳で一年間預かりましたが、まことにブロークンな日本語しか話せませんでした。それからいろいろ考えまして、やっぱり高校に入ってすぐに外国で生活させないと、本当の外国語というのはできないのではないか。本当は十二歳くらいが一番いいという考えがあるようでございますけれども、それじゃ小学校六年生ですからちょっと無理だということで、中学校を出て高校に入った段階で海外留学クラスを、淑徳高校、与野高校、巣鴨高校と一クラス三十人ぐらいづつつくりました。一年生の八月から、一年間、今、アメリカ、イギリスに提携校が五、六校ありますから、お願いをして、現地の子供と一緒に勉強させて十六歳半ばぐらいにこっちへ帰ってまいります。そのぐらいですと、中には、顔を

見ないで聞いていると外人さんかなと思うくらいしゃべれる子も出てまいりまして、外国語会話は若いうちがいいと、実感しているところです。

と同時に、それだけでは困る。異民族と上手につきあっていくことが大切です。どのような外国人とも対等に意見の交換ができる、コミュニケーションを十分はかれる人間を育てたいというふうに考えております。

つぎに、我々が若い人に対して意識しておりますのは、人の国を知って自分の国をよく相手に理解してもらおうと同時に、その人の国を知る場合、その国の人との何といいますか、痛みを感じてもらいたい。日本は今、経済的に最も豊かな国になっているらしいけれども、多くの国は非常に貧しいし、そういう国が日本の周辺にも多い。その痛みというものをも本当にわかる、やさしい日本人といえますか、そういうものを平素から印象付けておかなければいけないと、いつも学生に申しております。というのは、ODA（政府開発援助）でも何でもお金は出しますけれども、経済援助だけでは国際関係の上では余りよくないというんですね。この間のイラク、クエートの戦争を見ましても、ご存じのとおりイラクという国は貧しい国ですけれども、百九十五万人も兵隊を持っている。逆にクエートは石油の出る大金持ちの国ですが、五万人しか兵隊がない。ほとんど平和外交で軍備も

余り持たず、国連中心の外交を展開して、アラブ周辺の国々にも経済援助している。ちょうど今の日本と生き写しのような国なんです。けれども、いざイラクのクエート侵攻のときに、周辺国の同情が少なかつた。相当のお金も出しているし、平和外交に徹しているし、国連を尊重してやっているけれども、日ごろ外国人がクエートに行くと、特にアラブの諸国民に対してさげすんだ態度をとるとか、あるいは外へ出て非常に居丈高な態度をとると、何か今の日本人にちょっと似ているかもしれないませんが、それで周辺のアラブ人から余り好かれていなかった。だからあの戦争が始まったときに、あの辺のアラブの人たちが自分たちが相当援助を受けて感謝をしていながらも、一方では痛みを思い切れないような、そういう思いを持ったという話を日本の外務省の幹部から聞いたんです。やはり日本人に一番欠けているのは、自分たちが相手からどう見られていて、そういった恵まれない国に対して、本当に思いやる気持ちを絶えず持っていかなければいけないということですね。国際化の中で一番大事なポイントとして私は学生に教えております。

国際化にはたくさん問題がございます。日本を外国に知ってもらおうと言っても、日本人は外国人には余り日本のことはわかってもらえないだろうという先入観があるんですね。勿論外国の人も日本のことをまだ余り知りません。三十年前四年間ほど、私もブラジ

ルへ行っていました、日本じゃ飛行機が飛んでいるかなんて聞かれたり、この前もイギリスに行きましたときに、まだ日本はゲイシャ、フジヤマかというような認識で、ちょんまげ結って下駄はいて、多くが農民で田植えをしている、そういうのを本当にまだ信用している人もおられます。フランスの中学校で地理の時間に、日本はどこにあるんでしょうと言ったら、香港指してここだろうとか、また別の生徒はわからなくてあちこち探している。先生が様子を見てみると地図の上に手を乗せていた。それで、その手をどけなさいと言ったら、手の下に日本があったという笑い話があるんですが、つい最近まで日本を本当に知っていなかった。

これを急速に知っていたと努力をしなきゃならないんですけども、一方で日本は特殊な国だ、諸外国とは違うんだという考え方が日本人の中にある。ドナルド・キーン先生という日本学研究者がいますが、いつだったかこんな話をしていました。数寄屋橋でビラを配っている二人の女の子がいたので、自分はもう一つもりでいた。けれども、なかなかくれないというんですね。先生欲しいものだからそばへ行ったら、一人の女の子が見かねてぱっとくれたというんです。そしたらその隣にいた、一緒に配っていた女の子が、「あら、あなたそれ外人よ」と言ったというんです。キーン先生が「私は日本語わかります

よ」と言ったら、「どのぐらいわかりますか。日本語話すのは珍しいですね、だけどあなたお刺身は嫌いでしょう」と言ったら、「お刺身は大好きです」「納豆は食べられないでしょう」「納豆はもっと大好きです」と言ったら向こう向いちゃった。それでも「漢字は書けないでしょう」と聞いてくるので、「私は漢字をふつうの日本人よりよく書けます」と言った。そうしたらもうあきれられちゃったという話をしていました。

第二次大戦のときにキーン先生は、十六歳でたしかコロンビア大学に入って、暗号の解説などをやらされて、万葉がなから何から相当やらされたんだそうです。日本へ戦後来たときも、あるとき日本の有識者の集まりに呼ばれましたところ、床の間に何か難しい歌が書いてあった。それをみんな読めなくて、何と云うんだろうと云って困っていたら、先生がすくっと立ってすらすらと読み出した。すると、みんなが、「青い目のあんな外人がどうしてそんなものわかるんだろう」と驚いてしまった。先生は六年間も缶詰になって日本の文化、日本の思想を勉強して、今、アメリカでも日本学の中心をなしているようですが、そういう方が相当おられます。だとしたならば、日本人も外国人は全く異質なものだというふうに見ずに、絶えずグローバルな目で見て日本を知ってもらおう努力をする必要がございませう。

しかしながら、日本を知ってもらうためのお金も労力も、例えばイギリスの何分のいくらいしかかけておりません。GNPからいったならば、日本が三兆ドル、ヨーロッパ全体で五兆ドル強、アメリカが五兆ドル弱で、残りはほかの国だということですが、日本はもう世界の六分の一以上のGNPを持っていて、全ヨーロッパのGNPにだんだん迫ろうとしているのに、日本のその経済力の大きさに比べて文化に対する理解といえますか、文化の輸出というか、そういう努力は非常に欠けている。そのことについても学生に対して一生懸命、日本を宣伝するようにということをおっしゃいます。

### 宗教教育の今後

今度、大学の設置基準が変わって、一般教育については規制緩和されますので、それぞれの学校が自分で独自の科目を組めるようになります。そうしますと、相当思い切ったことをやる学校とやらない学校が出てくる。例えば、うちの場合でも一般教育の宗教をどうしようかとか、あるいは相当数の学校で体育が少なくなると思います。外国語なんかも、自由裁量と言うとどうなりましょか。

宗教は特別、義務的にやれとは言われていなかったんですが、今度自由にやっていいと  
なりますと、やろうと思う学校は宗教、特に建学の精神なら建学の精神について相当やる  
ところがあると思いますね。うちの場合、宗教という単位でやっていますが、これを建学  
精神に直してもっと具体的にやった方がいいという先生方の案が出ています。今までの社  
会学とか政治学とか経済学とか、そういう枠組で講義するだけではだめですと、もう全部  
メニューを具体的に書くんですね。しかも、今の学生の求めるものも考慮しなければなら  
ない。

この間、東洋大学ですが、読売新聞にアンケートが出ていました。一番勉強したいもの  
は何かといったら、地球環境論だということです。今うちの短大では地球環境論というのを  
ビートたけしの兄さんの北野大という人が教えているんですけれども、あの人は国際関係  
の仕事をやっています、東京工業大学の大学院と都立大の大学院で教えて、OECDの仕  
事もやっているんです。これはうちでも、確かにものすごい人気があります。二番目が、  
芸術文化、文学ですね。それから三番目はファッションだということです。この三つが学生  
が一番勉強したいという。うちの学校でもいろいろ調べますと、やっぱりそのデザインと  
かファッションとか、芸術文化、それからその地球の環境問題、こういう問題に対しては

ものすごい必要性を若い人が感じているんです。

そういう求めるものに授業のメニューをかえていこうとしています。ですから宗教の場合でも、これが本当に求められているか、求められていないか、その取り扱いが大切です。もちろん学校が教えたいものと先生が教えたいものと、それから学生が勉強したいものと、この三者を今釣り合わせてやっているところなんです。何々概論とか、何々特講でなく、もっと具体的でわかりやすい名称に変えようとしています。宗教もブームと言われていますが、わかりやすい名称で具体的に出して、きちっと若者が本当に聞きたくなるようなものにしていったらいいんじゃないかと思います。

それと授業の中身、メニューの解説を、慶応の藤沢でも多摩大学でも新しい大学の場合はシユラバスを新入学生に全部配る。五百ページ以上のもですが、それを見ると科目のメニューの解説が全部出ていて、学生がそれを読んでこないと授業で教授に指されたときに、君はシユラバスの何ページ読んできたかと、こう聞かれるんだそうです。最低限度それ読んでこないとだめだということになって、今そこそこを話しているんだというふうな、非常に学生の方もメニューをきちんと読んで授業に入ってくるという形に、最近なってきたりするようございます。先生方も必らず解説を書いて出して、自分で授業の自



己評価、点検をする。アメリカの大学では、学生が批評する。どの授業がよかったか、よくなかったかと、それで先生がいろいろ教授法の研究会やったり、大学側は給与やら先生のステータス、地位を決めるんだそうです。

今、日本からアメリカに行っている学生が相当います。それが向こうで教員を批評することに慣れて帰ってくるんですね。そうすると、学生同士がスピーカーとしての先生の能力というのを厳しくチェックする。一方では、これから社会人がどんどん学校に入ってきたり、外人が入ってきたり、帰国学生が入ってきましたと、消費者意識が非常に強いですから、払ったものに見合うだけの内容が求められます。そういう場合、特に宗教なんかは本当に心の安らぎになるようなものをきちっと与えて差し上げなければならぬ。そうすれば相当評価は高くなるんじゃないでしょうか。ただ、悩んでいない人にどう呈示するのか、その辺が大変難しいですね。まずは、やはり若い方の考え方を知るべきでありましょう。

### 現代若者気質

最近の若者について感じていることは、さきほどの建学精神を三しで理解させる話じゃ

「ごいませんけれども、若い人の感覚について、さきほどは食べ物の話が出ましたけれども、味の素の社長さんの話では、昔は開発部門の人がスープをつくって社長さんのところへ持っていく、そうすると社長や会長が飲んで「このスープはうまい」となると、大抵これは売れたんだそうです。舌の肥えた会長や社長が味の素の味の基準になっていた。ところがこのごろは会長、社長のところへ持って行って、「これはだめだ。すぐやめろ、こんなもの飲めるか」と言ったら、逆に「これはいける」と言って販売するとよく売れるんだそうです。これは冗談じゃなく本当の話しだそうです。

六年ほど前に、短大の校舎を建てたときに、一番最初に設計士が「あの山の中だから、これでは学生がかわいそうだ。六本木、青山、原宿あたりのような感じだとか、ロンドンの街角、ケンブリッジの街角の雰囲気を入れましょう」と言う。「それは結構でしょう、大いに入れてください」と言って任せたんです。ところがいよいよその色を塗るという段になって行ってみましたら、下の方はモザイク模様でディズニールランドよりまだ派手なんです。「これはいかにも派手すぎやしないか」と注文を付けたんですが、壁は全部塗り物でスタッコというスペイン風の、日本ではまだ少ないんだそうですけれども、そのピンク、モスグリーン、アイボリー、もう何だか七色最中みたいな、そういう色をもうまさ

に塗ろうとしていて、塗料も全部用意しちゃったと言う。これじゃ日本の大学は今、レジャーランドだと言われているけれども、本当のディズニークランド以上になってしまふ。これでは父兄からおしかりを受けるから、あなたやめてくれと言うと、「でも先生、今さらどうにもできません」と。「だけど、できないたって、君。こんな色を塗られたって困るよ」と言ったら、「これをやったら必ず、この周囲の緑にマッチして受けます」と、そこまで言われてはもう仕方がないので、ある程度のところまで妥協しました。

それでも随分、学内の年配の人たちから反対を受けました。大体五十代ぐらいから上の人みんな反対で、こんな色にしちゃって、金かけてとかどうとか、私も随分苦しみました。ところが開学式の前の日にみずほ台へ行ってみましたら、近所で事件があったらしく、いっぱい報道陣が来ているんです。これからスタートするのに縁起でもないと思ったのですが、ところがげがの功名というのはあるもので、そこへ取材に来ていたNHKの若い記者が二人、その事件のことを聞こうと思って、ぐるりと塀を回って門から正面玄関のところへ入ってみた。すると、何だか学校らしくないものがそこにあるではないか。見ると、やっぱり何とか短期大学と書いてあるというんで、これはおもしろいと。事件の取材はそっこのけにして校舎の取材をした。それで、その晩、さっと放送してくれたわけで

す。

やっぱりその辺が年輩者と若い記者の違うところなんです。事件の取材に来たのにそれは忘れてしまって、風変わりな校舎に注目した。我々が見ていると、こういう学校らしくないものつくっちゃって大失敗したとか、しかられやしないかと思ってどきどきしていたんですが、その記者が夕方、テレビで流す。そうしましたら、それから週刊誌やらテレビが毎日毎日、今でもまだ二、三件ずつ来ておりまして、中には自動車の宣伝のバックに使わせてくれとか、正月番組の舞台に使わせてくれとか来るものですから、みんなお断りしているんです。

ところが、そこへちようどうまい具合に、NHKを辞めた人を一人雇いまして、この人は報道機関にいたので取材の対応がうまいですね。フライデーなんか二、三人でばつと乗り込んできたときに、ああよく来てくれたと、中へ入れました。そしてカメラマンのために学生を百人ぐらいた集めて、「皆さん、こちら講談社の有名なカメラマンの方だから、写真をたくさんとっていただきなさい」なんて紹介したので、女の子の大歓迎を受けて三百枚も写真を撮ってくれた。それで「こういう立派な学校のお嬢さん方なら、私まだ独身ですので、ぜひ先生お世話していただきたい」などと言ったそうです。NHK出

身の教務部長が研究室でコーヒーを出して、建学の精神の話をじっくりしたんですね。それから一週間ほどしましたら、「先生、こういう記事でよろしゅうございましょうか」と言ってきたんですが、それが結構まじめで、立派に学校を宣伝してくれているんです。それもそのNHK出身の人が非常に上手にやってくれたお陰です。これは本当の話なんです。私はそのときにつくづく思ったんですが、周囲の学校がいかにも学校らしいので、子どもの校舎のように学校らしくないものがあると、かえって学校として引き立つのですね。

ほかが学校らしいものをつくっているときに、より学校らしいものをつくろうとしても、それは目立たない。他との違いをはっきりさせる。最近のCIといいますが、UI、ユニバースティアイデンティティー、あるいはコーポレートアイデンティティーというものの、これはいろいろなところで今盛んでございますけれども、学校らしくないものを考える。それには設計士にしても、非常に変わったというか、独創的な人が必要ということとです。

こうして考えてみますと、今の若い人の特徴の一つは、色や型の感覚に敏感だということとがわかってきます。制服なども、五年に一回ずつぐらいい変えたらどうだろうかということ

とを校長先生たちに提案しているんですけれども、例えば食べ物でも第一世代の商品ということをよく言いますが、何でもいいから腹いっぱい食べたい、腹いっぱいになったら次にはちょっとうまいものが食べたい。第三段階になりますと、いつでもうまいものが食べられるという状態、最近の成熟社会になってくると、いつでもいいものは着られる、いつでも食べたいものは食べられる。ファミリレストランぐらいのところならどなたでもいつでも行って食べられる。銀座の一流レストランだって行けないことはない。そういう時代になってくると、やっぱり精神的なものとか、文化的なものにその欲求が移っていく。いわゆる必需の時代から欲需の時代といえますか、ニーズからウォントに変わってきた。ですから、今の若い人は服ひとつ着るにも体を温めるために、あるいは隠すために着るのではなくて、自分のアイデンティティーを標榜するために洋服を着る。だからアイデンティティーがちゃんと標榜できなければ、それは洋服じゃないということになる。車ひとつ持つとしても、その車によってその人のセンスが発揮されるということです。性能が悪いなんていうのはこれは最初から論外でして、例えば車に乗っていても、六本木あたりをずっとBMWならBMWで通るとします。確かにBMWなりベンツの性能はいい。高速道路をすごいスピードで飛ばしてもゆれのない、いわゆる世界的なハイテクの技術を持ってお

りますが、そのことよりもむしろハイタッチといいますが、六本木をゆっくり通っている車をみんなが振り向いて見てくれる。そうすると乗っている人のアイデンティティーというものはそこにきちっと標榜される、そういうものを絶えず、成熟社会の若者が求めているんじゃないかというふうに思うのです。

制服などもそうです。淑徳高校では三年前、里見校長が花井幸子さんのところにお頼みしたんですが、それが去年、東京都で二番目に人気の制服になった。一番は嘉悦学園ですけどですが、五年前に最初にやったんですね。おかしいような話なんですけれども、制服のセンスみたいなもので学校を選ぶということが事実あるんです。お坊さんでも袈裟と数珠でもって、これが格好よかったらお坊さんになりたいと言う人がさつとふえてくるんじゃないかと思いますが、こういう話を私立の校長さんたちはしないんです。わかってはいてもそういうことを言うとうと教育に不熱心で、外側ばかり気にして、中ができていないからだと言われてしまいますから。しかし、今の若い人を見てるとそうなんです。教育の質の善し悪し、それは当たり前です。いいに決まっているんです。ただそれだけでは自分を表現することにはならない。むしろ人が持っていないもの、人と違うもの、しかもそれは高級なもので他と全く異なっている、そして話題性があって、非常に新規性のある、そう

いうものだから物を買うことになるのです。例えばカメラひとつとっても、私の子供なんかは、私が持っていたカメラなんかはもう見向きもしませんし、逆に、先日も最新式のテープレコーダーを買って置いておきましたら、さすがにそれはさっと持ってゆく。

今、三万円なら三万円出せば、どこの会社のテープレコーダーでも機能も性能も品質も大体同じですね。そうなりますと、それを買うときに何をもとにして買うかが問題となる。やっぱり情報をもとにしてそのものを買うわけです。その情報というのは、テレビや新聞や雑誌、マスコミで流されるその会社のイメージ、それによって若者が買いたい物をするように、なってきたております。うちの息子なんかにあてはめますと、例えば三万円するものが二万五千円で売っていた。我々ですとちょっと安いから、すぐ買おうかなと思えますけれども、子供から見ると、そういうものはむしろただでもお断りだ。六万円しても七万円しても人が持っていないから、あるいはめったにないから、節約してアルバイトしてもそれを買おうという、そういう物を介しての自己実現というんですか、そういう欲求というものは非常に強いものがある。それを持つことによって自分のアイデンティティーをしっかりと標榜したいという、そういう願いが今の若者の中にあるんじゃないかと思えます。



このことは、若者の行動をいつも見ているとたくさん出てまいります。ただ私どもが、若者について一番心配しますのは、今日は飽食の時代で、全く恵まれていて、物質的に何の苦勞もなく、テレビを子守に、お母さんがわりに見たりして育っている世代というのは、全部あてがいぶちで守られて育っていますから飢えを知らない。何か一つものを改革するために、チャレンジして、新しいものをつくろうという、意欲が薄くなって、非常にひ弱といえますか、別な言葉で言えば非常に保守的である。考え方として、あてがいぶちのものをただ受け入れているという、そういう若い人が多くなってくるように見受けます。それをチャレンジさせるのに我々一番気を使うのです。

例えば、給料をたくさん出しますと言っても、人は集まらない。最近の会社の求人をよくテレビ見てますと、非常に感覚的にすばらしく、若者を引きつけるものをいっぱい流している。もちろん給料もよくなってはいけませんし、休日も多くなければいけませんし、住むところもちゃんとしたところを与えなければいけないのですけれども、その若者が自己実現できるところといますか、こういうことをやれる会社なんだということをはっきり示さなければならぬと思うのです。

私どもも、いつも若い先生方に言っているのですが、あなた方が将来この学校をやって

いくんだから、自分のやりたいことがこの学校の中でできているのかと。やりたいことを見つけさせるのが大変なんですね。スポーツでもいいし、何でもいから見つけて、それに打ち込ませチャレンジさせて、一つのをしっかり確立させる。その自己実現のチャンスを与えるために、懸賞論文を書かせたり、ディスカッションのコンクールをやったり、六本木でビールパーティーをやったり、コンピューターの研究会なんていうのもやるんです。これらは年齢を一応、四十歳で切りまして、四十歳以下の人でやることにしていますが、そうすると四十歳以上の人は怒るんですね。長谷川理事長は若者ばかり甘やかすと。私は甘やかすんじゃないくて、このチャレンジしない今の保守的な若者にチャレンジさせて鍛えているんだ。だから、論文も書いてもらったり、ディスカッションもしてもらったり、研修会でいろいろなプロジェクトチームを組んで一つの開発業務をやってもらっているわけです。

苦しい時代に青年時代を過ごして校長や教頭になった人というのは、放っておいても絶えずチャレンジするんですけれども、今の若い、三十代から四十近い団塊の世代よりちょっと後の人たちというのは、本当にチャレンジをしない。逆に管理しやすいといいますが、されやすい、そういう人が多い。しかも今の若い十代になってきますと、それが

もっと管理されやすい、またしやすい層になってきまして、こういう若者が将来の日本を背負っていくということになると、将来大変動があったときに果たしてこれで耐えていけるんだらうかと心配になるわけです。

最近のテレビを見てましても、大学教授の偉い人が何か言っていると、こっちにタレントやなんかがいって、すぐ茶々入れる。そうすると、変なところで手をたたいたりして、大変失礼なことをしていると思うのです。我々だったらもう本当に恐れ多いような場面に、わっと聴衆が手をたたいて、非常に冷めた目で見ている。そういうのを見ますと、権威を一方では否定しながら、チャレンジをしない世代、こういう層をどう育てていくか悩んでしまいます。これはむしろ私が先生方から、こういう機会にお教をいただきたいと思っっているわけでございます。

### 先見性に賭ける

つぎにリーダーというものについて少し考えてみますと、まずリーダーは先見性を持つことが大切です。それから何か物事を実行する決断力というものを持たなければいけな

い。それから、情報を外から自由に持ってくる、情報網の人脈。と同時に、情報だけでなく人間関係を調整する、能力を十分に持っていなければいけない。さらに新しいものについてもチャレンジしますと、失敗が非常に多い。けれども、失敗の積み重ねの中からいいのがぱっと生まれてくる。

学校経営をおこなう場合、衰退していくものいつまでもすがっていませんと、自分も共倒れになってしまいます。ちょうど人間に幼少年から青年、壮年、老年と、四つぐらいの段階があるように、学校の教育事業でも一般の民間企業の事業でも同じでございまして、今は幼少年期だけでも、これがやがて青年になり、壮年になって成長していくものもありますし、反対にこれが今は壮年であっても老年期に入って衰退をしていくような事業がたたくさんございます。

ちょうど昭和三十八、九年頃若年労働力不足から政府がマンパワーポリシーの政策をとりました、いわゆる経済の高度成長期に人材確保のために職業学校をいっぱいつくった。実業教育ですね。それで、うちも巣鴨の高校で実業教育に力をいれておりました。補助金も出してくれるし、一生懸命やっておったんです。ところが、あるときこれはどうも危ないというので、四十七年に普通科に直そうということになりました、最初は校名を変えまし

た。それから普通科の中で商業を少しやり、やがて商業科を全部やめにしまして、ちょうど四十七年がご存じのオイルショックでございますが、あの辺から高度成長が終わって安定成長に入ってまいりますと、案の定、この実業教育というものが衰退してきました。今度の中教審の答申などでは職業高校と普通高校が二つあるといういろいろ問題があるので、これを一緒にして総合的な高校にしたらどうかということを言っている。しかし、もう二十年たっているんですね。四十七年に私どもが実施したことを、未だに公立高校などはそういう制度を残している。公立はつぶれませんからあれでいいんですけれども、私立の場合でしたらもうすぐつぶれてしまいます。こういうことはやっぱりリーダーとなる人、学校の場合は校長とか理事長、お寺さんなら住職が決断すべきです。攻めていくときは院代さんや若い副住職なんかにどんどんやらせる。うちの学校ですと部長さんとか、課長さんにどんどんやらせています。若い人に任せていいと思うんです。

しかし、撤退するときというのは、やはり責任者がどんなに反対を受けても自分の考えではつきりと、やらないと絶対にだめです。戦争を見ているもそうですね。関が原の戦いで、攻めていくとき、大将が真っ先に行くというのは余りないんです。大体、真ん中ぐらいの人がばっち行って、足軽がくっついて行って、大将が後方に控えているんです。けれ

ども、引くときを見ているとやっぱり大将が先にすつと引きます。撤退するときは大将が決断をして、引けと言わないと引けない。

ただし、ただ引くだけでないに、スクラップ・アンド・ビルドで衰退していくものを取りやめる。そのかわりに新しい成長の卵を絶えず三つか四つ、多ければ多いほどいいんですけれども、財政の許す範囲で成長の卵を幾つか抱えおく。もちろん、そのどれが成長するかはわかりません。時代の変化が非常に急速ですから、判断がつかないんです。三年もたつと、三年前に考えたことが、今はもう全くだめなことだということが最近よくございますが、その逆だって当然あります。

私どもの学校でも今度、男女共学にいたします。来年、高校がするんですけれども、ちょうど四年前に女の子には文学がいいだろうと思って英文、国文科をつくってみたんですけれども、最近では女の子が法律とか経済、医学、理学、工学の方にどんどん行くようになりました。アメリカの動向を見ておりますと、六年前のデータで大学の全学位ですと、女性の方が五二%、男性の学位の方が少ない。博士はまだアメリカの大学全体で女性が一四%ぐらいですが、修士は女性の方が高くて五一%というぐらい。恐らく、日本でもこれから急速に女性が男性をしのでいく時代に入ってくる。こういうときに、女性だけ

を別にしてやっていく行き方というのは、いかに時代おくれかということは随分前からわかっていた。わかっていたんですけれども、内部でいろいろ反対する方もあるもんですから時間がかかってしまいました。これはお父さん方が共学にするのを嫌がるんですね。娘はそっとして、特に地方の方は、傷つけないで自分のうちに引き取りたいと。ところが、お母さんたちは八割方、共学でやってもらいたいという、こういう電通のアンケート結果が出たものですから、共学にしたんですが、この女性の社会進出も、これから十年ぐらいの間に、今は予想もできないぐらいの状態が出てくると思います。

大企業の課長以上ですと、アメリカではもう現在約三割ぐらいが女性です。大学院の学位の状態も先ほどのとおりです。これが日本の場合、まだ二十年から二十五年くらいおくられておりますが、あれよあれよという間に世の中が変わってしまいますから、卵を幾つか抱えていく。結局、使い物にならないものもあります。しかし、これはだめだと思って温めていても、意外とそれが当たる場合がございます。このいわゆる開発的な業務というようなものについて、民間企業などでは非常に優秀な人材をそこへ集中させております。それが当然なんですけれども、どうも学校というところは企画開発業務に余力を入れないですね。ラインの管理職が片手間にやっているというケースが多い。学校の先生の

場合は大卒でしたら二十二歳で入って六、七年もやって三十歳前後になればほぼ一人前で見えてくるわけですが、民間企業では二十七、八歳で将来を選別して、優秀な者については開発部門に行ってもらって、人がやらなかったような仕事を与えております。

学校は競争の少ない社会でございませけれども、やっぱり企業という開発、企画、そして生産、販売、アフターケアを考えなければならぬ。学校という生産、販売というのは教育と卒業後の進路ということになるわけですが、そこだけをやっている。アフターケアの機能も非常に弱い。車なんかでも販売後に徹底したアフターサービスがあって、お客さんを大事にする。今、私どものところでは、ご父兄卒業生に対して一生懸命アフターサービスをやっているとございます。学校が一番やっていなかった開発とアフターサービスにいま力を入れさせていただいております。民間企業では開発業務の企画が上がっていったって、常務会なりがそれを認めて実施するという徹底したものがありませんが、学校の場合そこが弱い。人材の育成という点でも、もっと競争していける組織をつくっていかねばならないと考えております。

特に若い先生を大勢採用した場合に、先ほどのようにチャレンジしない方が多い、みんな若年寄りみたいで非常に保守的でした、言われたことは何でも聞いて素直でいいんです



けれども、このまま厳しい私学の競争時代に入ったら、生き残れないのではないか。日本の将来が危ないと同じように、非常に心配しております。そういう幹部候補生を育てることに今打ち込んでおりますけれども、功労者を軽視すると、中年以上の方から随分おしかりを受けます。しかしながら、若い人を鍛えて動いてもらうために、これは是が非でもやらねばならないのです。

私ももう五十代も半ば近くなって、もう年寄りのグループに入りまして、会社だったらそろそろ定年の年でございます。若い人を鍛える、次の世代が困らないように一生懸命バトンタッチの準備をしているような次第でございます。

学校とお寺と役所、余り変化がない世界だというようなことをよく言われますので、感ずるところを申しのべさせていただきました。

以上、余り教化の足しになるようなものはありませんが、学校とお寺と置きかえてみまうとき、多少なりとも寺院経営の方向をお考えになるときの参考にしていただければ幸いです。ありがとうございます。ありがとうございました。



# 思春期の心理と宗教の役割

東京大学教授 東運寺副住職 大村 彰 道

今日は、こちらの研究所の方から「思春期の心理と宗教の役割」ということで、何か話をしてほしいということでございます。

私は教育心理学を専攻して勉強しています。寺に生まれ育ちましたために、宗教とか、信仰ということと決して無縁ではなかったわけでありませけれども、心理学と宗教とを、あまりつなげてふだんは考えてきませんでした。学問的に、宗教の心理というものを取り上げて研究したということはございませんでした。今日の機会を本当にありがたいものと考えまして、少し考えたこと、あるいは勉強したことをご報告させていただきます。

それでは、今日のお話のたいの流れを申し上げます。

まず最初に、思春期。思春期というのは、非常にいい用語だと思いますが、必ずしも皆が使っているという言葉ではなく、むしろ青年期というような言葉に含めて使われたりしております。青年期の心理、あるいは思春期の心理とか、この時期発達していく上でどういう課題をそれぞれの子どもが抱えているかという発達課題を、簡単におさらいして、話を進めていきたいと思います。

要点は、この思春期の一番の難しい点は、子どもが親から離れて、自立していく、独立の人格を模索していくという、非常に過渡的なところであるというお話が中心になります。

す。そのために、いろいろな問題点が出てきて、そして思春期の子どもたちを抱えている家庭では、いろんな苦勞が絶えない、というお話をしたいと思います。

それから、思春期というのは、自分は何者であるか、自分はいつたい何なのかということを模索していく時期だと思えます。そこに至るまでに生まれてからどのような発達の過程を通ってきたのか、また思春期以降、成人してまた壮年期、さらに老年期というふうな発達し続けていくわけですけれども、そういう長い人生のなかで、どのような発達の様相を示すのか、という話をしたいと思います。

また後でお話しますが、思春期の子どもを持つ親といえますのは、だいたい四十年代から五十、早い方は三十五ぐらいかもしれませんが、だいたい四十ぐらいの中年なわけです。思春期の子どもを抱えることによって、この中年の親自身がまた発達していくことになりません。たいへんな苦勞をして発達していく。親自身も、自分とは何なのかという問いを発せざるを得ない、というお話をします。

そして、「登校拒否について」という鳴門教育大学の佐藤修策先生のたいへんなご研究がございますが、その新しい資料を利用させていただきまして、思春期の難しさをお話をしていきます。

しめくくりといたしましてお話の最後に、この発達の過程を考えましたときに、寺のほうから町の子どもたちを眺めて、宗教心といましようか、宗教的情操にどんな変化があるのかというお話をして、そしてまた、宗教が、あるいは私どもの浄土宗が、子どもたちや、こういった子どもたちを抱える親に、どういう助けの手を差し伸べると言ったらおこがましいかもしれませんが、どんな援助ができるのかといったことをお話しさせていただきました。と思います。このような順序で今日のお話を進めてまいります。

それでは、四三頁の資料をごらん下さい。ここに挙げましたのは「青年期の心理と基本的な課題」ということで、最近文部省から改訂版が出ました『生徒指導の手引』という本の中に簡単にまとめてあるものですが、これを出発点にしたいと思います。

青年期といえますのは、ある意味では非常に長い期間になります。中学生くらい、あるいは思春期というふうになりますと、ひょっとすると小学校の高学年あたりから、いろいろな身体的な、あるいは生理学的な発達が見られますから、小学校の高学年ぐらいから思春期、あるいは青年期前期と考えていいのかもしれない。本格的には中学校の時期。それから、青年期の中期といえますと、高校生の時期。それから青年期の後期といえますのは、大学生ということになります。実際には現在は、その青年期というのが伸び

青年期の心理と基本的な課題

(文部省「生徒指導の手引」改訂版、1990)

- (1) 身体の発育や変化への対応
- (2) 家族の監督からの離脱
- (3) 友人関係への適応、特に異性の友人への対応
- (4) 責任ある社会人としての人生観や社会観の形成
- (5) 将来の生活計画の確立とそのための知識と技能の習得

てまいりまして、三十歳ぐらいまでは青年期ではないかというふうには、幅広く考えております。ですから、日常的に青年といえますと、高校生か大学生ぐらいということになりまして、しょうけれども、今日のお話は、もっと低年齢のところから話を進めていきたいと考えております。

文部省の手引でも、そういう観点で書かれておりまして、青年期の特徴といえますのは、端的に、子どもから大人へと成長していく移行期、過渡期です。それから、特に身体的な急速な成長というものが出てまいりますので、それに伴いまして、肉体的にも、心の面でも、非常にアンバランスな、不安定な状況になっているという、ある意味で病気にかかりやすい、肉体的にもかかりやすいそうですが、心理的にも、いろいろ不都合なことが起こってきやすい時期です。そういう過渡的な、非常に不安定な時期と考えられます。

それが、一番上に出ております「身体の発育や変化への適応」。自分の体の発達、例えば身長ですと、十、十一、十二歳あたりから非常に伸びる。それから、体重ですと、十一、十二歳のころが一番変化する、変化量の多い時期ですし、胸囲、胸幅なども同様です。そういった、非常に急速な自分の体の変化に、本人も戸惑いながら、自分自身の体に適応していかなければならないということがあるわけです。



よく言われることですが、第二次性徴という性的な発達というものが男の子にも女の子にも見られるわけで、ある意味で今は、いろいろそういう性的な成長とか、あるいは性的なことについての情報がたくさん外界から入ってまいりますから、放っておいてもだいたいは心配ないようなものではありませんが、ときには自分の身体的な変化にとまどい、不必要な羞恥心というか、罪悪感を持ったりする。親があわててしまったらすると、何か自分が非常にいけないことをしたのではないかという受け取り方をしてしまい、自分が大人になつていくということを心理的に受け入れることができないで、いつまでも子どものままでいたいと思うようになります。特に女の子の場合、ふくよかな女性になりたくないという無意識の働きによって、非常に痩せて、いつまで経っても大人になることをある意味で拒否してしまうというような、問題となることが出てくるわけであります。

ここで特に取り上げたいのは、四三頁にあります二番目の「家族の監督からの離脱」とか、あるいは三番目の「友人関係」、新しい友人関係を作らなければいけないという話を、これから詳しくお話ししたいと思います。小学校の四、五年生くらいまでは、親との関係、後ほど詳しくお話ししますが、親と自分との縦の関係というのを非常に重要視して育ててくるわけです。そして、ある段階で親が自分の理想像になりまして、親のイメー

ジを自分の理想として、自分のなかに取り入れる。そして、親を模範として育ててくるわけですが、だんだん親の姿に疑問を抱くようになって、特に中学の一、二年生頃になりますと、親に対する疑問が出てくる。反抗が出てくる。あるいは親に対する反発、攻撃というものが激しくなっています。親よりは同輩の、自分らの友人とグループを組んで何かをしようという、友人との関係が非常に重要になってくるわけです。

親に対する反発といましようか、親の言っていることが必ずしも正しくないかもしれないといったこと、こういう感じを持つということは、発達の上で不可欠のことでありまして、非常に大切なことだと思います。「自分たちのことを親は理解してくれない」とか、そういうようによく子どもらは不満を言うわけです。それから、何か親にちょっと反抗というか、口答えしたりすると、今までどおり「生意気だ」というような態度で、父親も母親も自分の意見を抹殺するような態度に出てくるということに反発を感じたりするわけです。それで、「親の（あるいは大人の）権威をむやみに振り回さないでくれ」というようなことを言ったりする。

それから、これは大人にとってはつらいというか、耳の痛いことですが、子どもたちが「自分たちは非常に清らかな心を持っているのに、親はそれを汚すようなことを言う」と

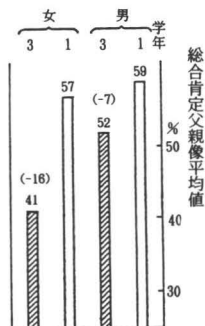
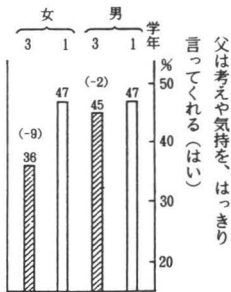
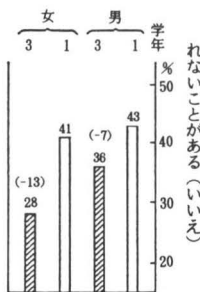
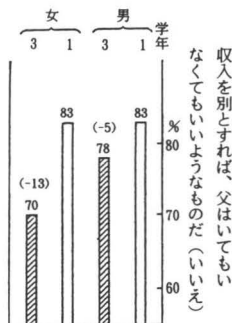
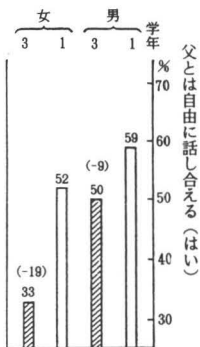
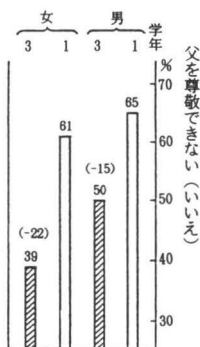
感ずるようになります。そういう自分たちの持っている清らかな心、誠実な考え方というものを親は必ずしも認めてくれないということをやったりするわけです。

親に対する反発から、今度は教師に自分の理想を求めるといふこともありますが、教師もやっぱり大人ですから、両親に対するのと同じように、教師への反発も、当然起こってくるわけです。教師は他人ですから、教師自身も自分の子どもは育てている親ではありませんが、自分の生徒に対しては他人ですから、生徒の親とは違った態度、違った見方、あるいは心理的な余裕といったものを持ち得るわけです。ですから、親とはまた違った接し方をすることができるようになります。

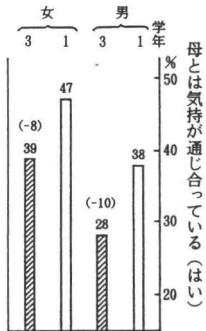
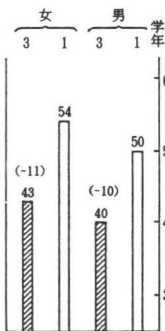
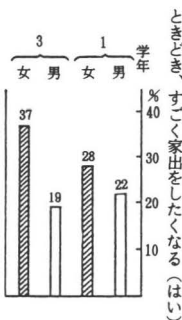
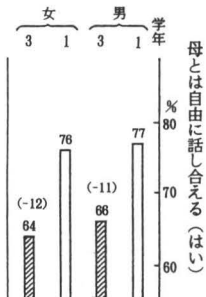
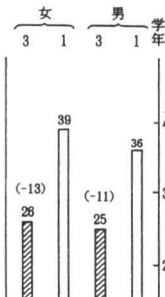
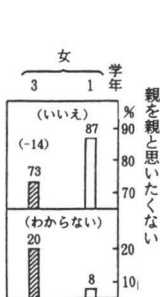
次の四八頁に、資料を挙げておきました。「中学生における父親像、母親像の学年による変化」という、これは一九七八年の調査なんです。村瀬孝雄先生、以前私どもの東大の教育学部の教授でして、今大正大学のカウンセリングを担当されている村瀬嘉代子先生、こちらでもお話しくださったそうですが、そのご主人にあたる方ですが、この方が岩波書店から『中学生の心と体』という本を出されて、これはとてもいい本だと思いますので、関心のある方はお求めになってお読みになるといいんじゃないかと思います。この本のかなかに、非常にはっきりとした調査結果が載っておりますので、ちょっと見ていきたいと思います。

中学校における父親像・母親像の学年による変化 (1978年)

(村瀬孝雄 1984)



思春期の心理と宗教の役割



います。

ずいぶんたくさんの中学生に対して調査をされまして、そしていろんな項目で聞いているわけです。四八頁の表を見ますと、「父を尊敬できない」という質問に対して、「いいえ」と答えた人の割合がどのくらいあるか。つまり、この図は「自分の父は尊敬できる」ということを表しているわけですが、中学校一年の男の子は、六五%ぐらいが尊敬してくれているわけです。三年になりますと、それが五〇%ぐらいに、ちょっと落ちてくるということです。それから、女の子ですと、中一の時には六一%ぐらいが父親を尊敬してくれておりますけれども、三年になりますと、四〇%ぐらいの人しか、父親のことを尊敬してくれていないというくらい、だんだん子どもがよそよそしくなってくるというのが、ここにきちっと現れています。

それから、中央の図ですと、「父とは自由に話し合えるか」という時に「話し合える」と答えた子どもたちですが、だいたい六〇%から五〇%の男の子が「はい」と答えています。それから女の子は、やっぱり父親とは少し話せないよう、特に中学校三年生になりますと、三分の一の子しか、父親とは自由に話し合えないと答えております。

その隣は、「収入は別とすれば、父はいてもいなくてもいいようなものだ」というひど

聞き方なんです、これは「いてほしい」というのが図に出ておまして、幸いにして八〇%近くの子どもたちがいてほしいと言ってくれているわけです。

下の図にいけますと、「父の言うことは、そのとおりに信じられないことがある」ということに対して、「いいえ」と答えているわけで、結局この図は、父の言うことは信じられるということなんです、五〇%を割ってしまいます。男の子でも、三年生になると三六%、女の子ですと、やっぱり三〇%近くに落ちてしまいます。「父親の言うことを聞いていると、いいことがない」なんてあからさまに言われて、ドキマギしたり、あるいは反省させられるということを、経験するわけです。

それから、「父は考えや気持ちをはっきり言ってくれる」という、これは五〇%弱の人が「はっきり言ってくれる」と考えておまして、そして総合的に「父親をどのくらい肯定しているか」という父親の総合成績がありますが、これが出ております。そうしますと、やはり中学校一年から三年になるに従って、肯定的な面が落ちてまいります。一貫していることは、女の子のほうが、父親に対しては厳しい見方、違和感を覚えている、という事が出ております。

次の四九頁になりますと、これは母親に対することであります。上の中央は、「母の言

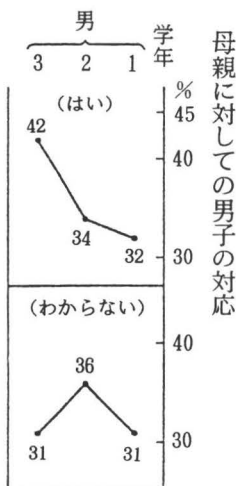
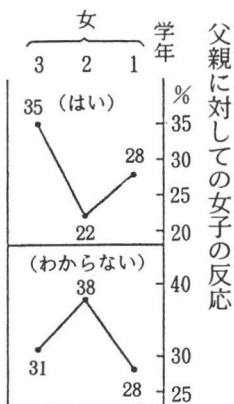
うことが信じられる」と答えている割合であります。中一から中三になるに従って、若干減っているということ。母と自由に話し合える」という、これはあまり男女の差というのはありません。多くの人が、話し合えると言っております。その下に「母とは気持ちを通じ合っている」と答えている。これは、女のお子さんのほうが若干高いということ、男の子が中三くらいになりますと、母親の気持ちとのずれを感じるというのがここに出てくるわけで、母親のほうでも、「息子が何を考えているかわからない。今までと違ってしまった」、もう少し進みますと、「何だか気味が悪い男の子になってきた」というような感じが、ここに出ているんだと思います。これなんかは、今まで非常に密接になっていた両親に対して、何か疑問を感じる様子が出てきているのだと思います。

左の頁に、「異性の親への信頼感に迷いが出てくる」（中学校二年）と書いておきました。これは、中学校一、二、三年生についてのデータですけれども、質問項目は、「父とか母の言うことは、そのとおりに信じられないことがある」ということに対して答えているわけで、上は、父親に対しての女の子の反応です。上のほうは「信じられない」ということでありますけれども、この中二の段階で信じられないということになって、それで「わからない」というのが増えているわけです。信じられるのか信じられないのか、わか



異性の親への信頼感にまよい (中2)  
(村瀬孝雄、1984)

「父(母)の言うことは、その通りに信じられないことがある」



らない。こういうところが、迷いが出ている様子だと思えます。その下は、男の子が母親に対してどう感じているかということですが、やはりこの「わからない」というところを見てみますと、中二のところでも若干高くなっている。こういう傾向が見られるわけです。

それから、その頁の左上にあります「親を親と思いたくない」という質問項目が、非常にどぎつい質問項目ですが、それだけに貴重な結果であります。これもやっぱり女の子のお子

さんで「わからない」と答える人が、三年生の時にこれだけ出てくるわけです。それから、「親を親と思いたくない」に「いいえ」と、親を親と思うというのが、三年生の時には減って、それから「わからない」というのが増えている。やはり、これも今までのデータと一貫しております。

それから、その下に「ときどきすぐ家出をしたくなる」という気持ちだが、やはり中一から中三に移るに従いまして、特に女の子さんで少し増えている。男の子は、ほとんど変わらないという結果になっております。

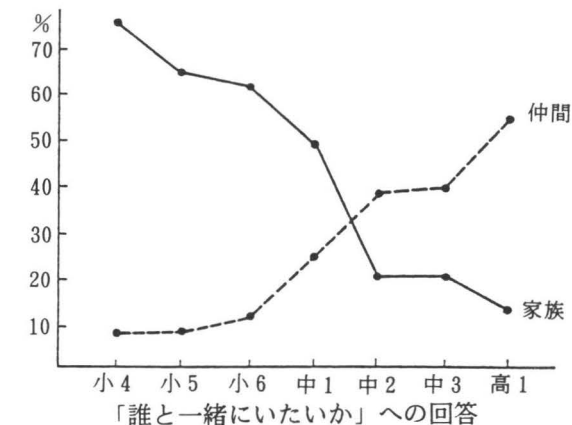
こういうことは、以前から、心理的離乳と申しております。母親のお乳から離れて、普通の食べ物になるのが離乳でありますけれども、心理的にも、母親から離乳していく。そして、母親のみならず、父親からも離れていく。それを心理的離乳と呼んでいて、どうしても、これは通過しなければいけない、人生における一つの関門であるというふうに言えます。

そして、子どもにとっても、あるいは大人にとってもつらいことでもありますけれども、一度は、子どもが持っている親に対する偶像視、うちの親はすばらしいという気持ちが壊される、破壊される、あるいは破壊されないまでも、疑惑とか不信感を経験する。それが

非常に強い不信感あるいは失望といったものになることも少なくないわけですが、そういうことを経験せざるを得ないということですから、これが、やはり思春期の過渡的な、非常に不安定な、親子共々つらい時期ということになるわけであります。

そういう時期を経験しないで、すつといく親子関係というのもあるわけで、難しいご家庭を見て、そういう問題を抱えていない親や家庭では、「うちはそういうことがなくて、本当に安心だ」とか、あるいは「あそこのご家庭は、あんな教育をしたり、ご両親があんなだから、子どもがあんなになっちゃうんだ」というような、突き放した冷やかな目で見たりします。しかし、非常に幸せなご家庭であっても、いつかは、やはりその子どもは心理的離乳を経験していかなければなりません。それが、高校生になってからかもしれないし、大学生になってからかもしれない。あるいは三十になったり、結婚の段階とか、人生のどこかで出てくるということが、ほとんどではないかと思うわけであります。

次に、この三番目の「友人関係への適応」ということでありますが、図1を見てくださいます。これは外国のデータなんですけど、非常に日本とも共通した結果が出ております。「誰といっしょにいたいか」という質問に対しての解答なんですけど、「家族といっしょにいたい」というのが、小学校の四年生からどんどん減ってまいりまして、それに対して「仲間



「誰と一緒にいたいか」への回答  
 (パウアー, T. G. R. (鯨岡峻訳): ヒューマン・ディベロップメント。  
 p. 417, ミネルヴァ書房, 1982)

図1

といたい」というのが増えてくる。ちょうど中学校二年のところで逆転しているというのが、これが非常に面白いことでもあります。先ほどの村瀬孝雄先生のデータともぴたり一致する結果であります。

小学校の段階までは、主に対人関係といいましょうか、親子の縦の関係というものを大切にしてやってまいりましたが、小学校の途中からですけれども、自分らの仲間たちと、ある意味で徒党を組んで遊びまわるといことが行われるようになるわけです。中学校になっても、それがだんだん進行了いまして

て、自分らの仲間たちとの関係を大切にすることを起こってくる。あるいは仲間たちの考えを大切にして、親の考えは二の次にするということが起こってくる。この友達との横の人間関係というものが、成立してくるわけでありませう。

昔からギャングエイジ、徒党を組んで悪さばかりするのでギャングエイジと言うんだそうです。いわば過渡期には、自分が親に対して疑問を感じながらも、一対一で親に対決すると、だいたいやられてしまえますから、一対一では親をやっつけることはできません。ですから、自分らの仲間、必ずグループを組んで、親に対して、あるいは大人の価値、考え方に対して反発をするという時期がくるわけです。

それが過ぎていきますと、仲間の考え方を大切にしながらも、自分と親とが一対一で決できる。あるいは、やっぱり親のほうが強いですから、対決とまではいかないですが、親に反発する。だけど、一人で反発できるようになってまいります。これが、やはり中学校二年くらいを境にしているようです。学校の先生方も、どうも中学校二年というのは一つの転機になるらしい、ということを経験からおっしゃっておられます。特に、中学校の二年生の夏休みの前後、夏休みの前と夏休みの後とでは、ずいぶんと変化して、いい子だった子どもが生意気になってきたりとか、大きな変化があるということがよく言われております。これはもう、皆共通していることだと思えます。

その仲間と共に過ごすことによって、あるいは仲間の考え方と交わることによって、何れ子どもたちはしているかという点、親の考え方とは違う、自分独自の考え方を模索して

いるのです。あるいは、先ほど申しましたが、自分とはいったい何なのかということ、意識的、無意識的に考えたり、迷い始めているということでありまして、小学校の段階では比較的安定して、問題なく過ぎてきた子どもたちが、意識的に、自分でも気づくような形で、自己を問うという最初の段階に入ってくることになります。

これは皆様に説法するみたいでたいへん恐縮なんです。当然宗教では自己とは何かということをお問ひしまして、それを大問題にするわけです。本来の自分というのは何かということをお問ひわけですけれども、この思春期の段階の子どもたちの問いというのは、そこまで意識的にはなっていないだろうと思います。その宗教家が言う自己とは何かか、本来の自己とか、そういう意識的な問い、意識的な追求というのは、思春期の子どもたちの自分とは何かという問いとは、はっきりと区別しておく必要があります。

宗教のほうでは、自分が作り上げた自我といましようか、我を、自我をつぶして、つぶし抜いていく修行をするわけですが、思春期の子どもたちというのは、ある意味でその最初の自我を作っていく段階ですから、ここでしっかり自我を、もう我のかたまりでないわけで、それを作らせてやらなければいけないと考えます。ですから、はじめから我はいかんだということではなくて、ここではやっぱり一旦は我を作って、それをわれわれ

思春期の心理と宗教の役割

老年期 VIII								統合 対 絶望、嫌悪 英知	
成人期 VII							生殖性 対 停滞 世話		
前成人期 VI						親密 対 孤立 愛			
青年期 V 12才～	} 思春期				同一性 対 同一性混乱 忠誠				
学童期 IV 6,7～12才				動物性 対 劣等感 適格					
遊戯期 III 3,4～6,7才			自主性 対 罪悪感 目的						
幼児期初期 II 2～3,4才		自律性 対 恥、疑惑 意志							
乳児期 I 0～1,5才	基本的信頼 対 基本的不信 希望								
		1	2	3	4	5	6	7	8

図2 発達段階 心理・社会的危機 (E. H. エリクソン)

は黙って見守っているということではないかと思えます。この点についてはまた後ほど触れさせていただきます。

ここにエリクソンという方の「心理・社会的危機」という図2がございます。これはいへん有名な図式でございます。まして、私たちが生まれてから死ぬまでに、人生におけるいろいろな危機を経験する。その危機を通過することによって、私たちは発達してゆくんだ、と考えるわけです。最近、発達心理学も、だいぶそ

れこそ発達、成長いたしまして、発達というのは、生まれてから死ぬまでが発達なんだ、従来の考え方のように、大人になったら発達はおしまいというのではなくて、本当に生涯を通じての発達ということを問題にするようになってまいりまして、そういう図であります。

一番左下のところに、これはエリクソンの考え方ではありますが、「乳児期」と書いてあります。「〇歳から一・五歳まで」というふうには、これは私が勝手に記入しました。あまり厳密に、この一・五歳までが乳児期だと考えていては具合が悪いです、一応の目安として、ここに書いておいたわけです。一・五歳といいますが、言葉が出てくる頃、少し言葉がしゃべられるぐらいで、知的な働きにもいろんな変化が出てくる段階であります。ここでは基本的にはお母さんとの間に安定した信頼関係というものが築かれるか築かれないかという、人生における最初の、非常に重要な危機的な場面が出てまいります。

よく言われることですが、子どもが安心してお母さんのお乳を吸っていた。これが、安心していられるというのが、基本的信頼。自分以外の者に対してというのでしょうか、まだ自分と他人という区別もできていない、自と他との未分化な段階ではありますけれども、ともかく安心してゆったりとしていられるという段階があるわけです。歯なんかが生



えてきて、お母さんのお乳を噛んだりしますと、お母さんに「痛い」といって拒否されるという経験を踏むことになります。今までせっかく安心していたのに、お母さんから怒られたり、つねられたり、あるいは邪険に揺すられたりとか、お乳から突き放されたりする。そこに基本的な不信というものが出てくる。この信頼と不信というのが、赤ん坊にとっては、基本的な不信というものが出てくる。この信頼と不信というものが、赤ん坊にとっては、基本的な不信というものが出てくる。この信頼と不信というものが、赤ん坊にとっては、基本的な不信というものが出てくる。

エリクソン自身は、ここの乳児期における発達を非常に重視しておりまして、ここで基本的な信頼というものが、不信よりも子どものなかで打ち勝っていくことが、どうしても大切なんだと述べています。そこから希望が生まれてくるんだとか、あるいは宗教における安らぎとか安心感といったような気持の基本は、この段階にあるのではないかとまで言っているくらい、重要なことであります。

その次の段階が、乳児期の初期。二歳から三、四歳くらいまでと言われておりますけれども、ここでよく出てきますのが、トイレット・トレーニングのことでございまして、おむつをしていて、したい時に排泄していたのが、それができなくなるんです。吐られる。それが自分で出したくてもじっと待って、そしていよいよ出していい時になったら出すというふうな、コントロールする。自分でコントロールしなければいけないということ

す。それを失敗していますと、恥ずかしさといったようなことが、基本的な感情として、対人関係の中に入ってくると、エリクソンは言うわけです。

それから、その次の三、四歳から六、七歳。ちょうど小学校一、二年生くらいのところは、自主性とか罪悪感というふうに書いてありますけれども、ここでは、家族といったもの、それから特に自分で作ったり、あるいは自分から積極的に真似をしたりとか遊んだりといったような、自主性が育っていく時でありますし、親が自分の理想として、あるいは超自我というんですが、親が道徳的な規範のような形で自分のなかに取り入れられていく。同一化といいますが、自分の中に親の規範が取り入れられ、良心といいましょるか、超自我の基礎が築かれる時期であるといわれています。何か、理想についての原型ができあがる時期だといわれています。

その上の学童期というのが、ちょうど小学校の段階になりますけれども、このあたりから、家族だけの人間関係ではなくて、学校における人間関係ということが出てまいりますし、意識的な教育とか意識的な学習といったことが、非常に重要な子どもの活動になってくるわけです。読む力、書く力、計算する力といったいろいろなことを学習しなければいけない。そういう技術的なことを学習していかなければいけない。学校教育といった人間

関係のなかで、その子どもたちは生きていかなければいけないわけで、そこでは勤勉性とか、反対に、自分はやってもうまくいかないといったような劣等感、勤勉性対劣等感といった葛藤がここで出てくるわけです。自分は、他の子どもに比べるとどうもうまくできないんじゃないかといったようなことがはっきり出てくるのも、この時期だといわれています。

その次が、青年期です。ここが、私どもの問題にしている思春期に当たるわけです。同一性対同一性の混乱というふうに、エリクソンは呼んでいるんですが、この同一性というのが、先ほど申しました自分とは何かという、自分はこういう人間なんだとか、自分はこういう特徴があるんだといった、そういう感じとか考え方を、同一性と呼んでいるわけです。

自分には何か自分らしい、昨日から今日にかけて、共通している、一貫している、安定している何かがある。それが自分なんだという内的普遍性といましようか、内的な安定性の感覚、あるいは、一貫性の感覚があります。自分は前から今までずっと一貫している。先週の自分も、あるいは夏休み前の自分も、今の自分も、一貫して同じ自分なんだという感じ。こういった一貫性とか連続性というのが、この自己同一性です。アイデンティ

ティーンとも呼ばれます。そういう自己同一性が非常に重要な感覚なんです。初めてこの自己同一性を、自分の中で模索し始める段階がここに当たるわけです。そのときに、先ほどから申しておりますように、仲間との関係が非常に重要になってまいります。

それから、その上の段階になりますと、これは青年期を過ぎて、前成人期ということで、エリクソンが考えたころは、もう三、四十年も前ですから、当然二十五、六ということで、前成人期とか、あるいは成人期にも入りつつあると考えたのかもしれませんが、現在は、自分の同一性の模索がそれこそ三十歳くらいまで続くというので、なかなかその上の第六番目の段階には入りにくくなっているといわれています。

ここには「親密対孤立」というふうに出ておりますが、対人関係で一番重要なのは、異性とどういう関係を持ち得るかということが発達課題であります。自分というものがその前の段階で確立してまいります。それから、他人にも自分があるわけですから、他人のなかにある自分と、自分のなかの自分というものを、どう両立させるというか、どういうふうに関係を築いていけるかということを考え、実践していかなければならない段階、これが「親密対孤立」ということであります。

それで、今度は成人期には、「生殖性対停滞」と書いてありますが、これは結婚して、

次の世代を育てるということで、生殖性という言葉を使わずに、世代性という言葉を使っている方もおります。反対は停滞でもいいんですが、自己陶醉というふうに呼んでいる人もあります。これがちょうど中年に当たるのでしょうか。子どもを育てて、世話をしているという段階です。それから、私ども三十代後半から四十代、五十代の前くらいの男女が共に経験すると思いますが、ある意味で自己陶醉です。自分がうまくやっているというところで、張り切って、自信を持って生活するのはいいんですが、いつしかそこに自己陶醉、増長と申しましょうか、停滞が生じてくる。

そして、自信を持ってそのまま幸せにずっといけばよろしいわけですが、自信を持って生活していったにもかかわらず、職場の上でとか、仕事の上でいろんな不都合が起こってくる。それから、ちょうど夫婦であっても、男女共に、不和といいましょうか、今までのようなことではなく、いろんな家庭的な不和、停滞といいましょうか、緊張感のなさと申しましようか、そういうのが生じてくるのもこの時期であります。大切なことは、この段階の人たちが、だいたいは思春期の非常に難しい子どもたちを抱えているということだと思います。これがやはり、中年にとりましても人生の大危機であるということになります。

それから、それを克服して先へ進みましたが老年期ということ、私はこの段階とい

うのはよくわかりませんが、エリクソンなんかがいうところでは、自分が長く生きてきた、この自分の長い人生というものを、非常に大切なかけがえのない人生であった、あるいは人生であるとして受け取れるかどうか、それがこの段階の方々の発達課題であり、危機、難関なんだということを言うわけです。エリクソンは、精神科のお医者さんですけれども、その発言は、宗教家の方たちとか、人生を考えた方たちの発言と、非常に一致しているのではないかと思います。

これでざっと一生涯の発達段階を追ったことになりましたが、この発達過程を頭に入れた上で、もう一度思春期、自己同一性、自分とは何かということを獲得する働きに話を戻してみたいと思います。それから、その親の問題に話を戻していきたいと思います。

私たちの中学、高校時代もちろん受験勉強が激しかったわけではありませんが、それでも今のように、高校への進学率とか大学への進学率は、高くなかった。ところが、現在の中学校、高校での学校の生活を見えますと、高学歴を求めて、ほとんど勉強、勉強の、しかも受験勉強のための生活に塗り込められているということが特徴なわけです。

それで、学校のほうも、それから親のほうも、やはりこの受験時代というのは、いろんな問題はあっても耐え抜いて、我慢して、通り抜けてもらわなければ困っているわ

けです。親も、受験勉強だけしていたのでは困るんだということにはわかつてはいますけれども、やはり目前の試験は突破してもらいたいと思っっている。学校の先生も、勉強だけさせていたのでは、人間形成の上でもいびつな人間になってしまふんだよということは百も承知なんです、それを前面に出せないということに、今なっているわけです。

先頃出ました教育審議会の報告書には、なぜ日本の受験競争というのは、こんなに激しいのかを分析しています。東大があんな入学試験をやるからいけないんだという説もあります。それも一つの原因かもしれませんが、しかし、その審議会のレポートの非常に特徴的なことは、確かに受験競争は激しくて、過剰な競争をしているのだが、どうもそれが日本社会全体の活力といましようか、それが発展の基になっていて、それ故そう簡単にはなくならないんだということを、冒頭に述べていることです。もちろん、こんな言い方ではなくて、もっと論理的に、非常に学問的な成果を取り入れて主張しています。受験競争の弊害を減らそうといういろんな工夫をするわけですが、やればやるほど競争が激しくなつて、勉強一本になつていく。そのために学校における価値観も、家庭における価値観も、学業成績一色になつてしまいがちです。

そういうことで、学童、思春期というものを送ってまいりますので、ある意味で自己と

は何かということは、下手に問うてはいけないうし、それを問うている時間がないということ、そこで時間を費やしていると、受験の面から言うとうと、あつという間においてけぼりをくって、取り返しのつかないことになるとうことになっていきます。

それで、子どもとしては、身体的な変化、自分の親への不信、それから自分はどうしたらいいんだといったさまざまなことを考えたいわけですが、まわりは血眼になって勉強のほうに走っているし、親からは「勉強しなさい。勉強しなさい。勉強してくれなければ困る」ということを、繰り返し言われている。それに対して反発はしたいんだけども、やっぱり親からガンガン言われると迫力がありますし、それから親は人生を生き延びてきているから、親の言っていることは正しいかもしれないという気持ちも当然あるわけですし、また、今までの子ども時代からの親と自分との力関係からいって、親にはなかなか抗しがたいという、いつでも圧迫されてしまうという、こういったいろんな不利な状況に子供達はおかれています。ゆうゆうと自分のことを考えられない、脇道にそれる時間的な余裕、あるいは心理的な余裕を持たないままに生活せざるを得ないとうことに追い込まれていくわけです。

そして、そういった子どもたちは、いろんな問題を起こして、そして親に対して、ある



意味で信号を送ってまいります。例えば、朝なかなか起きないとか、それから口答えをするというのはわかりやすい信号ですが、体の調子がおかしくなってくるとかいうことが起きてくる。そして、そういったいろんなことが起こってまいります。端的な、目につく、最近非常に問題になっているのが、この登校拒否の問題であります。

これを例に取ってお話ししたいと思います。これは、鳴門教育大学の副学長の佐藤修策先生という方が最近の雑誌にお書きになった資料です。『総合教育技術』（一九九一年、九月号）という雑誌がございますが、そこから取ってきたデータであります。七〇頁の図③は、年間五十日以上休んでいる子どもたちの統計を文部省が調査した、そのデータであります。ここでは、小学生と中学生と区別してありますけれども、小学生の場合は、ここ二十年くらいの間、そんなには増えていない。五十日以上欠席する子どもたちは、五千人台から六、七千人ですが、中学生の数が非常に増え方を示しているということです。

それで、ここにありますように、中学生の場合百四十人に一人と、ちょっと信じられない高率なんです。そういう高い率で、五十日以上欠席者が出ているということでもあります。五十日の欠席と申しますと、中学校の場合には落第させられるということはないんですが、高校の場合には進級できないとか、子どもにとっても、親にとっても、たいへん

昭和四十年くらいの時、ちょうどその頃から、この登校拒否ということが問題視されるようになって、一番最初は、これは非常に独特の精神病とか、鬱病とか、精神分裂病ではないかという受け取られ方をしておりました。そういう関心で、一部の人たちが取り上げていた。それが七〇年代になりますと、数がどんどん増えていくものですから、それからいろいろなケースが、子どもによっていろいろな状態があるものですから、単に精神分裂病では

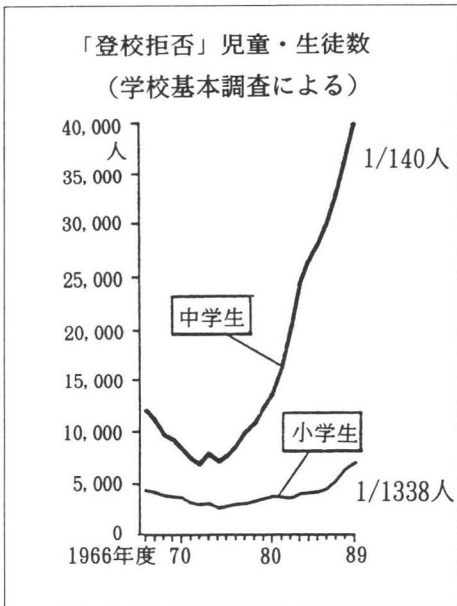


図3 登校拒否について (佐藤修策, 1991) 『総合教育技術』(1991年9月号)

なことになる日数なんです。中学生の段階で、この二十年間にこんなに登校拒否の子どもたちが増えてしまったという現実が  
 ございます。

この登校拒否の問題というのは、私が一番最初に関心を持ちまして、今はちょっとこの登校拒否の研究からは離れてしまいましたが、一九六五年、

ないかなどと言っていていられなくなって、もっと広い見方をする必要があるということになってきました。

八〇年代では、さらに数が増えて、ますますいろんなケース報告が増えてきた。そして、これは特別な、非常に変わった適応障害ということではないといましようか、特別な子どもにだけ、あるいは特別な家庭にだけ起こる適応障害ではなくて、どんな家庭でも起こり得る不適応状態なのではないかという認識が強くなって、今では、だいたいそういう考え方になっているわけです。こんなに高率に出てまいりますと、そう考えざるを得ない。どこの家でも、登校拒否の子どもを、あるいはそれに近い子どもを抱え得るんだ。また、実際に抱えているご家庭がたくさんあるんだということが、明らかになってきているわけです。

この調査と関連するんですが、学校へ行きたくないという気持ちを抱いている中学生がどのくらいいるかというのを調べてみますと、だいたい四二%だと言われております。普通誰でも、試験が近づいてくると「いやだな。学校が燃えてしまったほうがいいのにな」とか、冗談に思ったり、ちらっとは思ったりすることはあるでしょう。ところが、五十日欠席なんて、そんなに長いこと欠席はしていなくても、本当は学校へいきたくないと思っ

ている子が、四二%だという統計です。それから、こういった子どもたちに、実際に欠席の多い子とか、遅刻がちな子とか、早引きしてどこかへ行ってしまいう子どもなんかを加えますと、六七%ぐらいになります。ちょっとすぐには信じられないような、非常に高い率で、子どもたちが学校を拒否する、いやがる状態が起こってきております。それから、だいたいの全国の六割ぐらいの中学校で、必ず五十日以上登校拒否型の長欠児を抱えているということが言われています。

表1は、すこし細かい資料になりますけれども、登校拒否に陥り、学校へ行かなくなってしまう直接のきっかけというのが何であったかということ調べてあります。いろんなことが出ておりますが、学校生活での影響、友人環境をめぐる問題、それから学業の不振といったようなことが出ております。こういった学校生活が直接に影響してくるのは、どうも中学生になってからのようです。小学生は、その下にあります家庭生活での影響というほうが、率としては多いようです。このへんも、やはり小学生と中学生とでの心理的な発達が反映されています。小学校では、家庭の生活環境の急激な変化とか、親子関係のいろいろな問題とか、家庭内の不和というようなことが、一位に挙がっております、学校のほうは第二番目ぐらいなんです、中学生のところは、学校生活の影響が第一番目に躍

表1 登校拒否に陥った直接のきっかけ

単位：人、%

区 分		小学生		中学生		計	
学校生活での影響	1 友人関係をめぐる問題	④ 776 (10.8)	② 1,923 (26.8)	② 6,370 (16.0)	① 17,763 (44.5)	② 7,146 (15.2)	① 19,686 (41.8)
	2 教師との関係をめぐる問題	210 (2.9)		625 (1.6)		835 (1.8)	
	3 学業の不振	477 (6.7)		7,029 (17.6)		① 7,506 (15.9)	
	4 クラゲ活動、部活動への不適応	21 (0.3)		685 (1.7)		706 (1.5)	
	5 学校のきまり等をめぐる問題	56 (0.8)		1,381 (3.5)		1,437 (3.1)	
	6 入学、転編入学、進級時の不適応	383 (5.3)		1,673 (4.2)		2,056 (4.4)	
家庭生活での影響	7 家庭の生活環境の急激な変化	③ 814 (11.4)	① 2,594 (36.2)	⑤ 3,356 (8.4)	② 11,158 (27.9)	③ 4,170 (8.9)	② 13,752 (29.2)
	8 親子関係をめぐる問題	① 1,315 (18.4)		③ 5,151 (12.9)		① 6,466 (13.7)	
	9 家庭内の不和	465 (6.5)		2,651 (6.6)		3,116 (6.6)	
本人の問題	10 病気による欠席	584 (8.2)	③ 1,507 (21.0)	3,074 (7.7)	③ 7,251 (18.2)	3,658 (7.8)	③ 8,758 (18.6)
	11 その他本人にかかわる問題	② 923 (12.9)		④ 4,177 (10.5)		④ 5,100 (10.8)	
	12 その他	496 (6.9)	⑤ 496 (6.9)	⑤ 1,155 (2.9)	⑤ 1,155 (2.9)	⑤ 1,651 (3.5)	⑤ 1,651 (3.5)
	13 不明	⑤ 644 (9.0)	④ 644 (9.0)	④ 2,605 (6.5)	④ 2,605 (6.5)	④ 3,249 (6.9)	④ 3,249 (6.9)
計		7,164 (100.0)	7,164 (100.0)	39,932 (100.0)	39,932 (100.0)	47,696 (100.0)	47,696 (100.0)

(注1) なお、本調査では具体例を次のように示した。

(具体例) 1. 友人関係をめぐる問題…いじめ、けんか等

7. 家庭の生活環境の急激な変化…父親の単身赴任、母親の就労等

2. 教師との関係をめぐる問題…教師の強いしっ質、注意等

8. 親子関係をめぐる問題…親のしっ質、親の言葉、態度への反応等

3. 学業の不振…成績の不振、授業がわからない、試験が嫌い等

9. 家庭内の不和…両親の不和、祖母と母親の不和等本人にかかわらないもの

(注2) 丸付き数字は、順位を示す。

り出ています。

次に、図4といえますのは、登校拒否発現の主な背景ということで、真ん中に本人の性格が出ております。それから、そのまわりに親の性役割、父親らしいか母親らしいかという性役割、それから期待過剰なんて書いてあります。親が子どもに対して期待を過剰に持つといった、その家庭の原因、家庭の問題というのがありますが、そのまわりに進学競争とか、知的教育重視の社会とか、あるいは非常に高学歴社会であるといった、より広い社会、高度工業社会といったような現代の独特の社会のあり方といったものが実は影響しているんだということが、そこに出ております。

それから、あとでご覧になっていただきたいと思いますが、表2といえますのは、こういった登校拒否の子どもたちがどんな性格を持っているかということ、報告者と書いてありますが、いろんな研究者たちが特徴づけをしております。これを見てみますと、特にここには、神経症的な登校拒否を示す子どもたちというのが挙がっております。友達とうまくつきあえないとか、内向的、非社会的といったようなこと、非協調的といったことが、特徴的にここに出てきているわけであり、前にお話しました縦の関係から横の関係へ移っていかねなければいけないところで、苦労している姿が、ここに出てきているわけ

思春期の心理と宗教の役割

(佐藤, 1987)  
(●はきっかけ)

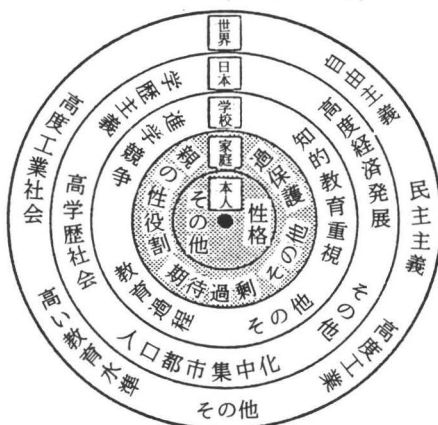


図4 登校拒否発現の主な背景因

表2 症児の性格特性 (佐藤, 1967)

報告書	パーソナリティ特性
鎌	引っ込み思案, 自己中心的傾向, 緊張過度傾向
山木	(内弁慶, 引っ込み思案) (裂気管) (退避的, 非社会的, 敏感, 臆病, 強情)
若林	非社会的, 内向的, 自己中心的, 非協調的, 情緒発達未熟
真仁田	問題解決の構えに乏しく, 逃避的で抑圧的, 完全欲求が強い
玉井	小心, 内気, 内弁慶
村田	情緒未熟を根底とした, 弱小な神経質傾向, 依存的で対人緊張が高い
佐藤	神経質傾向, 社会性の未熟, 内向性, 自己中心性, 鋭敏な感受性

です。  
表3というのは、これは教師から見た登校拒否の子どもの性格傾向ということですし、それから両親にも特徴的な性格があるのではないかという、これは当然考えられることで

すが、そこにもいろんな方たちが、父親の性格とか、母親の性格といったようなことが出ております。どちらかといえば、内向的な、内気な、あるいは非社会的な両親の姿という

表3 教師からみた「登校拒否の子どもの性格傾向」

性格傾向	学校			計
	小学生	中学生	高校生	
わがまま・自己中心的・非協調的	3	26	11	40
非社交的・内向的	4	16	8	28
自発性・自主性・決断力がない	2	10	6	18
忍耐力のなさ	1	12	3	16
依存的な甘え	2	6	2	10
劣等感を持ちやすい	1	3	2	6
過敏・心配性	0	3	3	6
反抗的・強情	0	2	2	4
活発・外向的	0	0	3	3
完全癖・几帳面	0	1	1	2
自己主張的	1	0	1	2
わからない	0	2	1	3
計	14	81	43	138

表4 両親の性格

報告者	父 親	母 親
鏑	自信欠如、個人との接触回避	不安傾向、過度の内向緊張
真仁田	心理的に母の代行	小心、自信欠如、心配性
村 田	小心、決断力に欠く、情緒未熟	感情表現に乏しい、じょう舌、社会的情緒的未熟
佐 藤	無口、内向的、非社会的	幼児性、過敏性、内向性
山 崎	非社会的、内向的、男性らしさに乏しい、積極性に欠く	未成熟、社会性欠如、依存的性、対人関係の困難、ひかえ目、きちょうめん
山 本	自己顕示、多弁、性格の偏り	母らしさに乏しい、母性的暖かさに欠く
玉 井	依存的、小心、社会性に欠く	依存的、内気、社会性に欠く

(愛知県教育センター紀要第58集・1976)



ことがここに出ておりますけれども、これは、七五頁の図4にありますように、この表4のような親だから、子どもがそうなってしまったということ、親にだけ原因があるんだということではないんです。先ほど私が強調しましたように、どのご家庭でも起こり得るのだということをお忘れなくください。

子どもが葛藤状態、例えば登校拒否になる、あるいは、休みがちになる、親の知らないところで学校へ行っているような顔をしたり、あるいは塾に通っているような顔をしながら、いろんなところで子どもたちは遊ぶわけです。中学生からお酒を飲む子どももいますし、マージャンも今は高校生よりは中学生に移りつつあるといわれておりますけれども、だいたい高校のころはマージャンを一生懸命やる。親はそれを知らない。気づいた時には、だいぶ進行しているというようになりまして、学校も休みがち、それから成績も落ちるといったことになって、気づいた時には、本人も「もう間に合わない」という絶望感に打ちひしがれるということになってまいります。定期考査とか中間考査の前になってきますと、朝起きられないとか、体の具合が悪いというようなことになってくる。

これは本人もつらいんですが、親も見えていられませんか「早く起きて学校へ行きなさい、学校へ行きなさい」と言うわけです。はじめはフトンをかぶったりなんかしております

すけれども、親も心配ですからつい「起きろ、起きろ」と言う。そうすると、はじめは筆箱を投げるくらいで済んでいるかもしれません。実は、筆箱を投げるとか机にあるものを投げるというのは、子どもはもう親からのプレッシャーにやり切れないということのサインなのでありますけれども、筆箱を飛ばしたりノートを投げるくらいのことでは、親はそれをサインだとは普通気づかないわけで、やっぱり「起きて学校へ行け」というようなことを言い続けるわけです。

そのまま、親が今までと同じような接し方で、ついプレッシャーをかけて、「勉強、勉強」やっていますと、だんだん子どもは逃げ場が失われてきますから、いろんなものを壊したりとか、破壊したりとかいうことになってまいります。その時にも、じつとよく見ているとわかるんですが、はじめは、例えばお母さんに物を投げつけたりとか、何か壊すという時にも、人に対しては危害が加わらないような攻撃行動に出ているはずなんです。ですけど、母親としては、あるいは父親としては、びっくりしてしまうわけです。あのおとなしかった子どもが、今までは口答えぐらいしかしなかった子が、何か投げつけてきたとか、何かを叩き割ったとか、親はもうびっくりしてしまいます。行動は激しくなりますが、やっぱり母親にはぶつけないように投げたり、何かを殴ったりしている。人間を殴る

前に、だいたい机を殴ったり、椅子をぶっ壊したりというふうにして、危害が加わらないように、子どもは子どもなりに、これは意識的にやっているのか、無意識的にやっているのかよくわかりませんが、やっている。それは、もう子どもからのサインなんです。だから、今までの親子関係というか、親の価値観を維持していたのではどうしようもないというところに親が気づかなければいけないんです。ところが、子どもを良くしたいという一念で気づけない。親もたいへんな苦しみを、皆味わうということになります。

もっと気づかないでいってしまいますと、今度は、親をぶん殴ったりとか、いろんなことが起こってくるわけです。これもやっぱり、家庭だとか学校が、学業成績一本という価値観で染まってきて、私たちがそういう生活になっているからなんだと思います。

長くなりましたので、結論に入らせていただきます。はじめに申しましたように、こうした問題に対する宗教の役割、あるいはもっと自分の身に引きつけて言いますと、私ども浄土宗の者が、どういうふうにもこの子どもたちと接して、どういうふうに助けていったらいいのかという問題です。私の結論を最初から申しますと、はなはだ迫力がなないのでありますけれども、子どもが自分を発見して自己同一性を獲得していくのには非常に時間がかかるということです。ですから、無用なプレッシャーをかけるな、ということ

なんです。子どもにいわゆるお説教をしたりとか、ガミガミ言っても、子どもは反発するだけです。それは、親に対しての反発、教師に対する反発がありますから、お坊さんに対してだって同じ反発を必ずしてくるであろうと思うわけです。熱心はその子のことを思っ  
て、「おまえ、学校へ行ってやれよ」とか「お母さんが心配しているんだから」とかとい  
うふうにこちらは言うわけですが、やればやるほど、そのうちに反発するようになるだろ  
うと思います。ですから、この思春期の子どもたちに対しては、私たちに直接的にできる  
ことは、非常に限られているような気がいたします。

一つは、学校とかあるいはそういう不安定になっている子どもたちの家庭における価値  
観というものは、もう学業一本、一色になっておりますから、われわれとしては、もっと  
別の価値観というものを、こちらが身につけて、そういう見方を持っているということだ  
ろうと思うのです。他人のお子さんに対しては、多様な価値観というのは持ちやすいだろ  
うと思うわけです。先生の言うことと塾の先生の言うことというのは、だいたい似てい  
ると思うんですが、お寺の人というのは、そういった学業とは離れた接し方ができるはずで  
す。学校の勉強のことなんか話さなくていいわけですから、そういった学業中心の価値観  
ではない、多様な価値観を認める。当然のことなんです、そういう接し方、そういう価

値観をこちらが持っているということだろうと思います。

もっと直接的に援助できるというのは、むしろ両親に対してだろうと、私は思っております。先ほど、中年期の危機ということを申しましたけれども、こういう子どもたちを抱えることによって、親というのはたいへんな不安、ノイローゼ状態とかいろんな状態が起こるわけです。こういう子どもたちの問題をきっかけにして、夫婦の間の価値観の食い違いとか、今まで積み重なってきて、何とか保っていた夫婦の関係とか結合というものに、ひびが入ったりするわけです。そういうことが必ず起こってまいります。

それから、両親のそういった今までの長年のちぐはぐさ、あるいは中年期を迎える停滞とか、お互いの自信といたしましうか、自己陶醉といたしましうか、そういったことでやってきたことが裏目に出始める。その不安が夫婦の間に、家庭のなかに出てくる。すると、敏感に子どもがそれを感じてしまう。子ども自身が非常に不安定になっている。それなのに、家庭のまわりが不安定になったら、子どもは本当に不安定になってしまう。

私どもがこの両親に対しては、やはり多様な価値観で接し、それからその苦しみを理解し、本当に了解する、その苦しみを分かち合うということが大切になってきます。そうすることによって、この母親や、父親を支えるという役割をはたすのです。ですから、子ども

もたちに対しては間接的にはなりませんけれども、親に対してサポートをするということが、私たちにとっては非常に大切なことではないかと考えております。

それでは、子どもたちには何もしないでいいのか。そっとしておいてやりたいわけですが、私はいかなるふうにも考えております。やっぱりこの思春期の子どもたちとか青年期の人たちというのは、自己を発見したいということと同時に、思想なり、宗教もそうだと思いますが、信仰とか、自分が打ち込みたいものを模索しているんだと思うんです。模索することが、自己を発見することになる。ですから、こちらがぐんぐん言いますと反発しますけれども、やはり本人は悩み続けて、何かを、あるいは自分を求め続けている。

青年期、中年となるに従って、必ずその人の心が、宗教とか信仰というものに向いてくるといふふうに、私は思っているわけで、この今混乱している子どもたちも、必ずや自我を確立します、がりがりの自我でもいいんです。ともかく自我を確立して、そしてまた一段落した後に、またその自分の自我を変えざるをえないということが起こってくるであろうと思います。心が再び、こういう宗教とか、仏様とかいうものに向いてくるのを待つということになるわけです。

お寺にきてくれれば、今申しましたような接し方もできます。一般の家庭に対しても、

こちらからできることはいろいろあると思います。例えば、浄土一洗会の方たちが努力されている「心の暦」とか、門前に貼り出しますいろんなポスターとか、標語、そういうもので、お寺がそこにあるんだということ、それから、直接的には子どもたちの心には踏み込んではいかないけれども、ここに寺があり、多様な価値観があるんだということを示し続ける必要があるのではないか。

その時、そのポスターとか標語などで大切だと思いますのは、特に思春期問題でつらい思いをしている親の目、あるいはその子どもの中から見てわかる、そういう標語なり、ポスターであってほしいと思うわけです。その標語あるいは「心の暦」を読むことによつて、何か勇気づけられるようなものを、それとなくご家庭に配れたらと思います。

読んで勇気づけられることばであってほしい。例えば今年の「心の暦」で申しますと、「しつけ」という標語がございます。何日だったか、ちょっと忘れましたが、「子どもは親の真似をする」とも書いてあるわけです。それはそのとおりです。しつけが大切だといふのはそのとおりなんです。苦しんでいる母親なり父親は、しつけを失敗したと思つて、自分の育て方が悪いと思つて、本当に滅入っているわけですから、「しつけ」という標語を出されても、勇気は湧かないわけです。「だめだった。自分らは子どもの育て方に

失敗した」としか思えないだろうと思います。

「子育て」という標語も、今年にはございます。「物よりも心を与えてよい子にし」ということですが、それももう本当に子育てには大切なんですが、その苦しんでいる親から見ると、「子育て」という標語は、つらい標語かもしれません。その標語があったらいけないというのではないんです。困っている、つらい目にあっている人も勇気づけられるようなものが、「心の暦」の中に入っていてほしいと思うのです。

「力いっぱい仕事に打ち込む姿は美しい」という標語がございます。これも、もうそのとおりなんですけれども、この子どもたちは、もう力いっぱい出したんですけど、だめなわけです。出したいこともわかってるんですけども、やっぱりふとんのなかから起きられない。出ていけない。その子どもたちにはいったいどういう言葉をそれとなく示してやったらいいのか。このような観点からの標語が必要なのではないかと感じております。

それから、これは以前写真入りの浄土宗のポスターで、女子高校生がシャツかなんか出して、「一人じゃないんだ」という標語が入って、とてもかわいらしいお嬢さんのポスターがありました。子どもたちにもアピールするんじゃないか、本当にいいポスターだなあと思いました。このポスターは貼りだしたら取られてしまうんじゃないかなと思ってい



ましたら、間もなく門前からなくなっておりました。思春期の子どもが取ったのか、もつと年上の子が取ったのかよくわかりませんが、ああいうようなポスターがとて面白いなと思います。

最近のでは、私の家で貼り出してまいりました「今を大事に生きたい」というポスターがございます。ご老僧と中学生でしょうか、小学生でしょうか、かわいいお嬢ちゃんがこのにこしているものです。これなんかもとてもいいポスターだなと思って、貼ってあるわけですが、私がそれとなく標語だとかポスターをというのは、こういうことを言いたいわけであります。「今を大事に生きたい」というポスターなんですが、下の方に「月に一度の寺参り」と小さく入っているんです。これは、私どもには本当にいい標語だと思いませんけれども、思春期の子どもには、いいものかどうかちょっとわからない。「なんだ、コマーシャルしている」と、反発するかもしれません。ただ全体としてはとてもいいアプローチが、あれで私たちはできるのではないかと思っております。

そのほか、親を勇気づけるようなポスターとか標語はいくらでもあるわけで、例えば、「花は語る命の尊とさ」というのがございました。「ほとけ我を見たまう」というのがございました。「葦のしげる池にも月は宿る」という標語。「ほとけの光はあまねく照らす」

という言葉。それから、「瞳はいつも澄んでいよう」ということもございましたが、こういうものは本当につらい目にあっている人たちにも、心にしみるものではないかと思えます。女の子が柔道着を着て、「夢まっしぐら」という標語の入った法務省のポスターがいرونなどところに出て、お寺にも貼ってありますけれども、このようなアニメーションのマンガによるポスターもとてもアピールしているようです。

以上いろいろと述べてまいりましたが、子どもに対するこちらの出すぎない、見守るような態度でのアプローチと、それから親に対するより積極的な援助というところに、私どもの役割があるのではないかと考えております。これで終わります。ありがとうございます。

女性と宗教

佛敎大学

社会学部助敎授

場ば知ち賀か礼れい文もん

こんにちは、場知賀礼文です。皆様の定例研究会で一言話をと依頼されまして大変光栄に存じます。

私は確かに皆様と同じ国籍を頂いておりますが、皆様とは少し異なる日本語を話すかと思われまので、何卒お許し下さい。

まず、社会学とはどういう学問なのかを簡単に述べますと、社会学とは社会あるいは集団の中の人間について考察する学問だと言えます。だから社会学の観点は、普通はかなり広いものです。そうであってもかなり細かいところに触れることも出来ませんが、一般的なことが多く、大ざっぱで面白くないところがありますけれども、社会学が「社会の学問」である以上、広い観点をとらなければならない気がします。

例えば「現代の女性」について語ろうとすれば、特定の女性、例えば家庭における女性とか、働く女性とか、専門職をもっている女性のことだけではなく、全ての女性にあてはまるような話をしなければならぬと思います。先程すでに言いましたように、社会学的な見方を紹介してみたいので、単なる一般的な話で終るわけではありません。

それでは、まず女性一般についてですが、一口で言いますと、女性は不思議な存在です。歴史を振り返ってみたり、また小説などを読んでみたりしますと、女性の美しさと

か、母としての偉大さが称賛されて、縁の下の力持ち的な役割とか、そういうものが誉められたりすることが多いんです。不思議に思えるのは、非常に誉められたり、賛美されたりと、そういうふう非常に良いことがよく話される反面、貶されることも多く、差別されることもよくあります。

古代ローマのある人がこう言いました。女性と一緒に生活することは出来ないが、いなくても困ると。現代西洋では、女は曆に似ているという言葉を冗談として耳にします。これを日本語に直しますと、女性と暦は同じということで、新しいにこしたことはないという意地悪な言葉です。

ちなみにもう一つ挙げますと、歩くときに真直ぐに進まないで横這いするのは外交官と女性と蟹だ、というのがあります。注意深く行動することはいいことだ、という意味でそれほど悪くないとも言えます。一方女性とは違い、男性の悪口はそれほど耳にしません。が、なぜなのでしょう。それはともかく一般的に言って、女性については非常に誉めることもあれば、貶すこともよくあるということです。

今日、皆様とご一緒に特に考えてみたいのは、女性のもつ様々な役割についてであります。不思議と申しますか、矛盾と申しますか、女性の役割には一貫性がないということ

す。役割の概念は、社会学には幾つかの定義があるんですけども、簡単に言えば、役割とは「期待に対する行動」、「期待される行動とその様式」のことです。期待とは厳密に言えば、集団の期待ですが、ここではそれほど厳密に考える必要はなく、その期待の主体は一定の地位をもっている個人と考えて下さって結構です。

例えば三世代の家族の場合、若いお嫁さんに対する親の期待とか、兄弟がいる場合はその兄弟からの期待、主人からの期待、子供からの期待、それぞれの期待があるわけです。

もう少し広くみますと、女性に対する男性一般の期待もあります。もちろん相手の女性の考えとか期待もあるでしょう。このように女性に向けられる期待は一致せず、様々なものなのです。一人の女性の心の中に迷いが生じることがあります。迷いは必ずしも起こるわけではないですが、かなり多く起こるのではないかと思えます。このことが結局ここでのポイントになります。もう一つのポイントは、社会的な考えでは、その期待が正しいかどうか、それはあまり関係がないということです。

さて女性の役割行動を少し具体的に考えてみましょう。第一に、女性に対する男性一般の期待があって、それは女性に対して女性らしさを求めることではないかと思えます。例えば、女性が美しくいて欲しい、上品であって欲しい、優しく行動して欲しいというよう

なことかと思えます。女性らしさは、厳密な意味では役割行動ではありませんけれども、広い意味ではそれも一種の役割なのです。

第二に、結婚した男性の一部は、妻はただ家庭を守り、子供を産んだのだから、その子の母でいて欲しいと思っています。こういう男性は年々少なくなってきているかもしれませんが、以前は子供を産むことが女性の天職とされていたので、この期待はまだまだ根強く残っていると推察できます。

考えてみれば、自分のお腹の中に新しい命を宿すことほど、素晴らしいことはないのではないのでしょうか。現在、世界の人口は大体五十億になっているようですが、誰が子供を産んでも双子以外は、必ずその五十億人とは異なった唯一の人間になります。子供は育て、各々平均したら七、八十年くらい生活することになります。自分自身の世界をつくって、途中で不幸もいろいろ体験するかもしれませんが、各々の人には素晴らしい人生を作る機会が与えられています。このように見ますと、新しい命を作ることは、非常に深い意味をもっていると言えます。

第三に、最近の若いサラリーマンのうちに、妻に共稼ぎをして欲しいと思っている人も増えています。共稼ぎは今の時代、ある程度必要になったということもあります。特にマ

イホームを自分の力で手にしようと思えば、一人の給料だけではなかなか間に合わないでしょう。

第四に、仕事を持ちたくて、社会に出たいという希望を多くの女性自身もっています。教育の状況を見ますと、現在男性も女性も同じ教育を受けていて、男女は同じような能力をもっていると考えてさしつかえないでしょう。ところが企業の期待はそれに対して、女性に補足的な仕事を与え、一番下の地位で働いてもらいたい、そういうことが多々あると思います。入社して、四、五年たったら辞める女性も多いですから、その意味では仕方がないかもしれませんが、仕事の面で差別される女性もかなりいるのです。例えば、いくら大学卒であってもパート扱いにしかされない女性もいて、それは一つの問題ではないでしょうか。

第五に、多少の女性は、いわゆる「キャリアウーマン」の夢もっています。女性がよく活動する領域は、社会事業とか医療や教育の世界等ですけれども、企業や政治の世界で出世する女性もいることはいます。

最近、街の中で車を見ますと、女性ドライバーも非常に多くなって、時には非常に立派な車を運転する女性もいて感心しますが、単に女性ドライバーの数が増えたということだ



けで、男女平等の時代が来たということは言えないかもしれません。

以上の期待は女性のもつ全ての役割期待ではありませんけれども、主な役割に触れ得たかと思えます。繰り返して言いますと、女性のイメージには、美しい女性、母としての女性、共稼ぎの社会人としての女性などがあり、これらは男達や家庭から見たイメージです。企業の立場からだと、補足的役割しか果たせない一時的社会人としての女性、それに「キャリアウーマン」という女性などがあります。このように女性には重なるイメージが実際あるわけです。

既に申しましたように、ここでポイントになりますのは、これらのイメージは一貫したものではないということです。社会学的に言いますと、この五つの役割は役割セットにはなっていません。

もちろん、大抵の女性はこれらの役割を同時に果たすことは出来ないのです。良くて各々の役割を一つ、あるいは二つ実現出来るかもしれませんが、以上のような五つの役割があるとすれば、多くの女性はその中の幾つかの期待にそわないということなのです。そこに役割葛藤が起こりえますし、具体的に言いますと、女性の心の中で迷いや不満が起こりえます。

もしも逆に、女性像が一貫したイメージならば、例えば以前によくあったように、家庭を守る母としての女性のイメージが支配的だったならば、その状況はある程度大変かもしませんが、他の役割を予想出来ないから迷いは起こらないのではないのでしょうか。そして、迷いがなければ不満もそれ程起こらないわけです。男性の社会的役割についていえば、職業における仕事が一番大切な役割だとすれば、それについては迷いはあまり生じません。

もう一つの重要な観点は、それぞれの役割を別々に考えても一貫性が存在しない、という事です。言い換えますと、それぞれの役割にはプラス面とマイナス面があります。これをもう少し考えてみますと、最初の「女性らしさ」、つまり女性的な魅力という点ですが、大抵の女性はそれを希望することでしょう。それに頼り過ぎて必要以上に美に価値を求める人もいますが、そこに美をめぐる競争心とか嫉妬心が起こり、女性同士の対立感情が生じます。

反対に、外観的な美をそれ程評価しない女性もいれば、またそれを要求しないライフスタイルもありますので、こういった女性らしさとは決して一義的なものではありません。したがってそれは場合によっては、やっかいなものになるのではと推測できます。

第二に、母という役割についてもプラス面とマイナス面があります。子供を産むことは実は大変な苦勞であって、母はある程度自分の身体を犠牲にして子供を産みます。子供を産む女性すべてにあてはまるわけではありませんが、一般的に少し早く老化します。

一方、子供を産むことによるプラス面の一つは、子供から愛されるということではないかと思えます。子供を大事にする母親は父親よりも、大人になった子供に大事にされ、愛されるわけです。ところが、自分が産んだ子供を自分のものにしようと思えば、大きな間違いを起こしてしまうかもしれません。こんな事情ですと、子供を産むことに対して疑問さえあることもあります。

第三に、共稼ぎですが、高等教育を受けた女性は社会に出て活躍したいでしょうし、家庭内の仕事だけでは家事の機械化のために退屈になることもあるでしょう。また、場合によっては経済的な事情のために働かなければならないこともあります。外でよく働き、家庭に帰れば帰ったで家事の主役が待っています。このように、共稼ぎは多くの場合、女性にとって二つの仕事を担当するようなことになります。こんなことでは夫婦の間に良くない緊張感が起こる恐れもありますし、働く女性にとっての不安の一つになるかもしれません。

第四に、キャリアウーマンの充実感はいろいろあるでしょうけれども、おそらく男性と対等に働いて同じ地位を手にできるということではないかと思えます。ところが出世するために多くの場合、結婚や家庭生活を犠牲にする必要があります。だからキャリアウーマンとしての夢はそれほど素晴らしい夢ではないかもしれませぬ。

第五に、大半の女性は結婚しますので、妻の地位は当然極めて大切であります。結婚している女性の幸福は妻としての幸福ではないかと私は思います。もちろん幸福とは何か、それは簡単に言えません。生活の楽しさとか、生活における充実感、そして人間としての意味の充実感などもありましよう。

このことを少し考えてみましょう。幸福の一つの条件は楽しい生活だと思われませんが、生活が楽しいかどうかということとは、主に仕事の面から見た感じのことではないでしょうか。仕事で過ごす時間は結局一番長いですから、仕事自体が楽しければ人生は楽しいと言えます。もちろん仕事で得る給料とか仕事自体の意味などにも左右されます。さらに、楽しさは人が持っている自由時間の楽しさにもよると思われます。自由時間が退屈ならば、それはかなり大きな問題です。

幸福のもう一つの条件は生活の充実感だと思えます。男性ならば、それはおそらく仕事

における業績や出世から得る感情だと考えられます。女性にしても同様に仕事が大切でしょうが、母としての役割も極めて大切です。女性にとつての充実感とは献身的な仕事、あるいはそういった態度から得られるのではないかと思ひますので親としての充実感もかなり大きいといえます。

幸福の条件としては生活の楽しさと充実感とは別に、「人生の意味」という側面もあろうかと考えられます。それはつまり、人間としてどのように評価されるのかという、人間関係から得られる感情なのです。仕事での評価も大切でしょうけれども、何よりも親しい人間関係、つまり夫婦関係における評価が重要ではないでしょうか。

一言で言いますと、愛されることによつて人間は人間として大いに評価されます。つまり長い年月が経つても変わることなく愛されて、自分に不十分なところがあつても、欠点があつても愛されるならば、自分が全面的に大切な存在だという、そういう実感が可能になります。逆に、夫婦の間に何かの事情で愛情がなくなつたとすれば、それは人間としてかなり大きな打撃ではないでしょうか。なぜなら自分の人間性が問題にされるからです。

人間の幸福の条件は、男女共に大体同じですけれども、女性は本来やや受身的で、また弱い立場にあつて選ばれる相手ですので、愛されるということは女性にとつて最も大きな

意味をもってしていることではないでしょうか。選ばれて結婚したときに一応安心できますが、それからもずっと愛されるだろうという保障はありません。

最近時々報道される欧米での離婚率を見てみますと、本当に驚きます。数字は覚えていないですけども、離婚率は非常に高いです。お互いに子供の親として、離婚せずに我慢している夫婦もかなりいると推測できます。お互いの愛情を信じていつまでもその愛を維持することが出来るといふ錯覚を起こして結婚したものの、結局、わがままを通して二人一緒に生活し、利己主義的になぶつかり合いながら愛情を少しずつなくしていつてしまうのではないのでしょうか。理由はなんであれ、愛情がなくなった場合、非常に大切なものを失います。毎日のように大事にされ、全面的に評価され、尊重される機会を失います。

もちろん、そのような愛情の喪失は、ある程度補うことが出来ます。子供の愛もあるし、自分の親の愛とか、友人からの友情、又さらにレジャー活動、ゴルフでもやろうとか、グルメの味を覚えようとか、ファッションな洋服を買ったり、いろんな形で失った愛を補うことは出来ます。また新しい愛を求めることもできます。

かなり異なる対策ですが、宗教に救いを求めることもできます。もちろん既に信仰をもっている人も多くいて、喪失状態で信仰を深めることもあります。

実は女性は男性よりも宗教によく頼ります。それは世界的な傾向です。一般的に言えば、男性はより合理的で目的追求に情熱を傾けて、そういう意味で外向性を持っていますが、女性はむしろ感受性が豊かで素敵なものを求めたり、心の幸福を求めたり、そういう意味で内向性をもっていて、宗教的感情を起しやすいです。

もう一つの要因は先に触れましたように、女性の社会的な弱さとか不安定性も関係しているかもしれません。ところが、これといった信仰が無い場合、どこで救いを求めればいいのか、とまどうに違いはないと思います。そこで現代社会における宗教の立場を考える必要があります。

これは今日の話の第二部であります。簡単ですが、結論から先に述べましょう。それは、現代社会において宗教の位置が弱くなったということです。宗教が弱くなったということは、宗教に疑問をもって人がいるということ、さらに宗教は無用のものだと思っている人がいること。また最も困ったことに、宗教が人間に弊害をもたらすものだということに考えている人の態度であります。このように弱くなった宗教に救いを求めにくくなったということが結論です。

そこで一体どうすれば良いかを考える前に、まず世界における宗教の現状を分析し、客

観的に見るのが重要ではないでしょうか。宗教が弱化した要因として、文明の発展と価値の多様化、さらに科学の発展と宗教の多様化あるいは宗教の世俗化の四点を若干考えてみたいのです。

現代社会において宗教の位置が極めて弱くなったということは、目で簡単に確かめることが出来ます。社会で多大な影響力をもっているのは、大きな建物を有する組織です。都市で一番大きなビルは何なのか皆様はご存じですね。宗教が多大な力をもっていた時代には、寺院や教会がそれであったのですが、現在一番大きなビルは疑いもなくビジネス関係のものであって、銀行だとか、大企業のオフィスビルとか、さらに、巨大なデパートやショッピングセンター、ホテルなどは、私達にそれぞれの関係者の偉大さを訴えています。

京都の場合ですと大きな寺院が散見され、知恩院を初め、東西本願寺、相国寺、大覚寺などのようにながりの規模をもつものもあります。それらは文化的に大きな意味を持っていると思いますが、宗教的には大きな役割を果たしているでしょうか。京都は日本の文化的な都ですので。それはともかくも、大阪や東京を見てみますと、宗教関係の施設は徹々たるものに過ぎません。この状況は、現代社会において宗教がもはや支配的な役割を担っ



ていないということを物語っております。

社会における宗教の役割をみますと、十九世紀までは文化的活動や教育が、ほとんど寺院や教会を中心に行なわれていたわけです。宗教が教育や文化活動の中心から離れて周辺のものになったのは、宗教自体が悪かったからではないのです。又経済が現代社会で主役を果たしているのも、もちろん宗教のせいにすることは出来ません。

いわゆる近代化は社会と文化の発展の結果であります。宗教の独特の領域とも言える人生観や思想を支配する人間は、十九世紀までは主として宗教家であったのですが、近代社会では哲学者、今世紀の初め頃から心理学者や社会学者等の影響力が非常に増してきました。最近の情況は異なります。

現在、人生観や思想に圧倒的な影響を及ぼしているのは、何よりもマスメディアだと思います。今世紀まで続いてきた農耕社会は、少しずつ産業社会へと変わり、最近では脱工業化社会と情報社会に変わってきました。脱工業化社会は、簡単に言いますと、生産と並んでサービス業や情報提供が経済的に非常に重要になったことを意味します。生産もサービス業も情報提供も、その全てが経済的な原理で動いています。つまり経済的な価値が支配的な価値になったわけです。

このことは精神的な価値を重視する宗教にとっては大きな問題ですが、このような問題が起こったのも宗教のせいにすることは出来ません。現代社会の重要な特徴の一つに、思想的に決定的影響を及ぼすのはもはや宗教者でも哲学者でもないということがあります。だから、頭を抱えているのは宗教者だけではなく、哲学者や他のインテリ層の人たちにして同じことです。

これはいわゆるポストモダンの現象の一面です。とにかく現代において思想的に多大な影響力を持っているのは、それは何よりもマスメディア関係の多くの人間です。新聞やテレビで活躍する多くの評論家、新聞記者、コメンテーター、映画監督、更に出版物を発行する出版社、小説家、漫画家などがそれです。このように、影響力の源泉はばらばらであり、思想的なセンターと申しますか、精神的な世界を支配するものがなくなってしまったというのが、現代社会の著しい特徴ではないでしょうか。

ちなみに言いますけれども、漫画の出版物は最近では全ての出版物の三分の一を占めており、売り上げはその四分の一に達しているとのこと。しかし、漫画に精神的な価値を求めることは出来るでしょうか。

とにかく、マスメディアの発達は価値の多様化という現象を引き起こしています。これ

はここでの第一の問題点です。その第二の点は、科学の発達によって宗教に頼る必要性が少なくなったということです。科学の発達については、今更申し上げるまでもありません。

女性自身に関連する科学的研究に若干触れますと、子供を産む受精のメカニズムが明らかに、その操縦が可能になりました。ご存じのように、試験管中で受精を起こして、受精した卵子を卵巢に入れたりすることが出来るのです。これによって、更年期に入ってから妊娠も可能になりました。以前は子供が出来ない場合は神に祈ることしかなかったのですが、現在はお医者さんに行って手伝ってもらったり、代理の母を探したりすることが、アメリカでは多くなっています。

エピソードですけれども、南アフリカのある女性が自分の孫を産んだということが報じられましたし、アメリカでも現在ある女性が双子の孫を妊娠中だそうです。このように、宗教に頼る必要性は少なくなり、超自然の世界も信じにくくなったわけです。もちろん、このことも宗教のせいではありません。

第三に、宗教の多様化のことですが、一般的な話をしますと、人間は古代からパンだけでは生きられないということに気付いて宗教的思想を起こし、宗教的行為を行なってきま

した。西洋では、ユダヤ教やキリスト教、回教など多くの宗教が活躍しています。東洋ではヒンズー教系と仏教系の多くの教団が形成され、日本だけを見ても、非常に多くの教団があります。

私たちは諸々の宗教を詳しくは知らないけれども、ある程度はわかります。信仰対象のアラーとか、神とか、阿弥陀如来とか、そういう名称は言うまでもなく、それぞれの宗教が行う宗教的行事なども、大抵誰でも知っています。

そこで、真理とは何なのか、本当の宗教とは何なのか、それが宗教の多様化によって疑問になります。みんながみんな正しいはずはないと、一般の人は考えます。宗教の多様化、多くの宗教の存在は誰にでもわかっていますので、信仰を得ることが難しくなっていきます。そういう意味で、宗教に救済を求めにくくなったと言えます。このことも結局、宗教自体が悪い、ということから生じているわけではありません。

四番目に、狭い意味における世俗化、つまり、あんまり良くない意味での世俗化なんです。宗教者がいわゆる俗人と同じように生活し、同じ価値観をもってしまふということです。カトリックの神父と、プロテスタントの牧師に対する批判の大抵がこういうもので、彼らは福音的な生活、あるいは聖書に従った生活をしていないという批判です。この

ことをどのように考えたら良いのかわかりませんが、この種の批判があるのは事実であって、そしてそれはもちろん宗教者自身の責任であります。

次は宗教の役割についてであります。これは宗教によって異なることがありますので、一概に申し上げられません。一般の人にとっての大切な活動は通過儀礼だと思われる。誕生や結婚、死亡という人生の大事な出来事に関わる儀礼のことです。その一般的な意味は、人生の重大な出来事を荘厳に祝うことによって、その精神的な意味を高揚することだと思えます。

次に大切なのは毎日の勤めや礼拝や祈りではないかと思えます。宗教者、あるいは信徒は日常生活において信仰を生かさないと、あまり意味がないのです。信者であるならば、毎日は無理でも少なくとも規則的に何かの宗教的な行為を行なわなければ、大した信仰とは言えないことでしょう。

さらに大切なのは、信仰の意味内容を理解し、宗教的意識を深めること、あるいは宗教的な価値観を深めることだと思われれます。キリスト教ですと、それは聖書の勉強ですが、浄土宗ではおそらく三部経、仏教一般ですと四諦八正道などその理解を深めることは宗教にとっても非常に大切だと思います。

最後に、簡単に結論を述べたいと思います。女性について申しますと、現代社会では女性には様々な活動を行えば、さまざまな役割行動も果たしています。この事情によって現代の女性像、あるいは女性のイメージというものが新しく形成され、多様化します。もはや全般的な女性像は一貫したイメージではなくなったということです。だから、どういう女性であるべきなのか、個々の女性の心の中で迷いが生じることがあります。

宗教についての結論もこれに似てますが、宗教に関連する一貫したイメージが存在しないだけではなく、非常に混乱したイメージがあります。だから宗教をあてにすることは極めて難しくなったのではないのでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。

(ベルギー生れ、昭和五十五年日本に帰化)

# 現代人教化への可能性

—— ビジネスマン世代に向けて ——

教化情報センター 21の会代表・西蓮院住職 飯田順雅

私の属しております「21の会」と申します会は、頭に教化情報センターという言葉がつき、教化推進会議から生まれた会でございます。本来なら一宗でやっていただくべきことなのですが、一向にやっていただけなら、やりたい者だけが始めようではないかということ、いわば教化の情報部門を集積し、またそれを広げていこう、そして情報を一つのキーワードとして教化に取り組んでいく姿勢を見せてみようじゃないかということ、全国から主として若い人たちが集まった会でございます。

今日申し上げますことは、実は自説ではございません。ここ数年この情報化という時代を一つのテーマにして、いろいろな研修会をやってまいりました。「21の会」でタッチをしてきたことの集積というふうに、お考えをいただきたいと思います。

「ビジネスマン世代」に向けてという形でテーマをいただいたわけですが、正直申しまして一体ビジネスマン世代というのは何なのだろう、何歳から何歳までがビジネスマン世代なのかということ、正直云って迷ったわけです。今これを仮に四十代、五十代、あるいは六十代の前半としまして、一般的にビジネスマンの先端をいつている人たちとし、同時にそこそこの責任を持っている人たちととらえてみますと、やはり数の上では男性が主になってくると思います。そういう人たちは、言ってみれば日本の活力の源であるわけで



す。

その人たちが一体宗教というものをどんなふうにとらえているのか、その人たちにとって宗教というのは一体何なんだろうかといいるところから、このビジネスマン世代の宗教観というものをとらえてみたいと思います。

### 宗教への四つの形態

その人たちは宗教というものを、一体どんなふうにとらえているのだろうかということ、四つほどに分類をしてみました。これは言っておきませんが大暴論でございますので、偏見に満ちております。けれども、一つの真実の一面を切って取った部分があるかと思えますので、お聞きいただいたらいいかと思います。

そこでビジネスマン世代と言われる四十年代、五十年代、あるいは六十年代前半のビジネスマンの人たちにとって、宗教というのは、まず第一には知識教養として宗教というものをとらえている世代、それから第二におよそ宗教なんてものはなんとなく胡散臭いものだという形でとらえている世代でもあります。第三には習俗として、あるいはたしなみとして、

おつきあいとして宗教というものをとらえている世代でもあります。そして第四には一方で宗教というものに対して、絶対的な価値のあるものだととしてとらえている人たちもいるということでございます。

この四つの分類法というのは、念のために申し上げておきますが、日本の四十代、五十代の男性がいつまでもそうであるということではございません。今日の四十代、五十代の方々、あるいは六十代前半の方々は、極端に申しますと、宗教的な素養が少、青年期には欠落している世代であります。宗教的な教育を受けられなかった時代に育ってきた世代でございます。そういう世代の方々が今、日本を大きく動かしているわけでございます。

そこで今の四つのパターンを一つづつ考えてみたいと思います。その分析をした上で、それではどういうふうな教化の方策がありうるか考えてみたいと思います。

第一にはこれはもう皆さんよくご存じと思いますが、知識教養として宗教をとらえている人たち、この人たちはとにかく今日、情報というものが溢れかえっております。したがってその情報を自分なりに整理しながら教養として宗教をとらえているのであって、決して自分自身の問題として宗教をとらえている人たちではないということです。あくまでも一般論として、宗教というものをとらえているということです。ですから自分の問題と

して宗教が近づいてきますと、ひらりと身をかわす人たちです。

具体的に申しますと、顕著なことは、例えば仏教というものを目の前に提示いたしますと、宗派としての仏教は決してそういう人たちは唱えません。お釈迦さんの説かれた仏教の基は何なんだ、仏教的なもの発想法とは何なんだ、そういう形でとらえてくるわけです。キリスト教に対してもそうです。新旧の別、その他の発想の違いは一切論じないで、キリスト教とは何なんだという問いに答えを求めてゆく。そういうパターンを持った人たちということなんです。とって、宗教というものを哲学の面から探求をしたらどうなるんだろうかということまでは、決して追究はしない人たちでございます。そこまで追究すると自分のところへ跳ね返ってまいりますので、ひらりと身をかわす人たちです。恥ずかしくない程度まで、知識として宗教をとらえ、しかし距離は一定に保っておきたいという人たちです。

それから二番目に、これは非常にたくさんおられるわけですが、宗教というものはなんとなく胡散臭いものだという態度を貫き通す人たちです。これはこのビジネスマン世代には顕著なパターンですが、これは宗教アレルギーに非常に近いということでございます。宗教アレルギー症候群ということになってくるわけです。

これは宗教に対して、否定も肯定もいたしません。否定をしたり肯定をしたりしますと、これは否応なく自分と関わってきますので、否定も肯定もしません。できれば避けて通りたいものとして、宗教をとらえているわけでございます。もし何らかの形で宗教と接点を持たなければならぬ場合には、最小限に留めておこうと努力をする人たちでございます。

三番目に習俗として、たしなみとして、この宗教というものにタッチをしている人たち、これが実は浄土宗で檀信徒としてとらえている人たちの中に、実は最も多いケースじゃないかと思えます。と言いますのは、今仮に浄土宗で考えますと、浄土宗というものに対して、適当な知識と常識はちゃんと持ち合わせておられる、そして義理がたさも、誠実さもちゃんと持ち合わせて宗教、あるいはお寺との付き合いも程々に接点を持つとうとする人たちでございます。ですから当然宗教的な行事ですとか、イベントとかそういったものも適当に参加をしていただきます。忙しい時間の合間を縫って、あるいは貴重な休日をそのために割いてくださる人たちでございます。

また同時にこういう人たちの特徴としましては、慶び事、弔い事、慶弔事ということにはむしろ積極的に参加をしてくださいませ、非常に義理がたさを見せる人たちでございます。

ます。当然年令的に一家の長として、あるいは会社の中ではまさにトップとして、あるいは中堅のリーダーとして、絶えず宗教というものが話題に上ってきますと、その必要性は認める、そして先祖は大事にする、先程言いましたように習俗とか慣習ということに対しては、わりとうるさいタイプでございます。口を出してきます。けれども自分自身の宗教的な信念であるとか、あるいは自分の精神的な、あるいは心の安定を決して宗教に求めてこようとはしない人たちでございます。ここが厄介なことでございます。しかし日本人独特の義理がたさと申しますか、バランスのとれたお付き合いだけはきちっとしてくださるタイプです。

そして最後に絶対的な価値を宗教に求める人たち、これは今日のビジネスマンと言われる人たち、特に先端を走る人たちには、ここ数年顕著にこういう人たちが現われてきております。ストレス解消法としてですけれども。この宗教というものに対して、決して相対的な価値観ではなくて、唯一絶対のものとして宗教をとらえる、したがって自己の安定はそこで計られるわけですが、この方々の特徴としましては、必ず他者にその価値観を押しつけてくるということでございます。会社のトップであるならば会社ぐるみでその信念、信仰をとらえようと部下にそれを押しつけてくる、同僚にも押しつけてくる、そしてそれ

を拒否されますと、そのグループその会社からその人を排除していくというパターンが顕著に、見られるわけでございます。これは非常に乱暴な分類の仕方でございますけれども、今日の四十代、五十代、あるいは六十代前半の方々の非常に顕著な姿と言えらると思えます。そういう意味で、ある一面をとらえさせていただいたわけでございます。

## ニューメディアを使つての教化

それではそのような現実に対して、教化者として一体何が出来るのか、またどうすればいいのかと、こういうことになってくるわけなんです、その辺を一つ今回はニューメディア教化と言いますか、新しいメディアを使った教化という切り口から、その人たちに近付いてみることは出来ないだろうかという形で、話を進めさせていただきたいと思ひます。

分析と言うほどの分析ではございませんが、そういうビジネスマン世代の特性を頭に入れておきながら、新しいメディアを使つての教化で果たして可能性はあるのだろうかというところでございますが、このニューメディアという言葉が実はもう既に一人歩きを始めて

おりまして、どこからがニューで、どこからがオールドなのか、実は非常に不安定な言葉でございます、今日一般的にニューメディアと申しますと、テクノロジーの上で更に先端を行くものということになってまいります。教化の線からそういったものをとらえてみますと、通信衛星を使ったサテライト放送でございますね。これを教化に組み込んでいけな  
いだろうか、あるいはパーソナルコンピュータを使ってのネットワーク作りで教化の方  
策を考えられないだろうか、あるいはファックスを使っての教化、あるいはワープロ、パ  
ソコンを駆使しての教化、または映像部門を重視してまいりますと、これは当然ビデオの  
活用ということになってまいりますし、ストリートに教化に結び付けやすいものとしては  
CATVがございます。有線テレビでございます。有線テレビの場合には、非常にローカ  
ルなと言いますか、その情報が広がる地域が限定されておりますので、宗教的な情報を流  
す上ではかえって有利な面もございます。まずそのあたりをニューメディア、新しいメ  
ディアを使っての教化というふうにとらえていってもいいかと思えます。

当然そういったものを複合して利用してまいります、イベント教化と申しますか、舞台  
芸術を駆使しての教化、レーザー光線を使っての教化、あるいはサウンド効果を使う、つ  
まり音楽、音、リズムを使っての教化といったものも当然ニューメディアという形でとら

えられてまいります。そうしましたら、テレフォン法話ですとか、あるいは寺報を発行する葉書伝道をやる、こういったメディアを使つての教化というのは既にオールドなのもかもしれません。そのニューメディアという形ではもうとらえきれなくなっているのかもしれない。それほどもう既に一般化しているということでもあるかと思えますけれども。

ではそこで、ビジネスマン世代に焦点を絞つて一体何をしなければならないのか、今私はニューメディアというメディアの部分で例を幾つか挙げましたけれども、お気付きと思えますが、これは全てハードの面ばかりでございます。テクノロジーの部分ばかりでございます。しかしそれは宗教として、つまり教化という視点から考えてまいりますと、その道具が幾ら新しくても、伝える内容が古ければ何の効果もない、これはすぐ出てくる答えでございます。つまりソフトの内容ですね。ソフトそのものが最新のものであって、初めてニューメディアと言われる道具が生きてくるわけですので、そのソフトの検討、ソフトの充実ということが図られない限り、どんなメディアを使つたってビジネスマンどころか、初めから聞こうと思つて、教化を受けようと思つてこつちを向いてくれている信仰を持った人たちに對してすら、発言権なんてものはなくなつてまいります。

ではそこで何をしなければならないのかということになってくるのですが、ここでこの





も、見てみたら結構仏教も魅力あるじゃないかという気持ちを起こさせることの方が大事だということ。ですからその導入があれば、これは他人ごとじゃないかと、自分自身の問題だという形で宗教をとらえていってもらったら、あるいは仏教なり浄土宗というものをとらえていってもらいさえすれば、これはもう導入オーケーなのです。あとは押せ押せということになってくるわけです。

また同時に、最後に申しました絶対的な価値観を宗教というものにどうしても求めたい人たちには、他にもたくさん価値観がある、そういった価値観の中で相対的な判断をするすべを情報として提供していけばいいわけなのです。どうも宗教というのはすぐに絶対性と結び付けられるようなんですけれども、仏教というのはこれは普遍性の最たるものなのです。まさに物事を相対的に判断をして、そこから正しいものを選び出してくる世界のはずなのです。私はそれが仏教だと思っております。

これは元「月刊アーガマ」編集長でもあり、現在インターカルチャー研究所代表の松沢正博先生がちょっとおっしゃったことなのですが、鎌倉仏教の活力ということで、非常にあの方は力説なさるんですが、鎌倉仏教が生き返った、あのエネルギー熱が現出したのは、これは仏教を相対的にとらえたからなんだ、たくさんのお教えの中から選択をして、こ

れはいんじゃないかという形で新しい発想を各祖師方が生み出されたから、あそこで仏教が大きく蘇ったんだ、宗教改革が行なわれた、それは決して絶対性ではなくて、相対的な価値判断の中から生まれたからなんだということを、非常によくおっしゃるのです。私も今改めてこれが問い直されている時ではないかと思えます。

特に宗教的なものに頼らなくても、仕事に専念するだけでなんとか日々を送れることで満足しているビジネスマン世代の人たち、しかし一度挫折がくると、もののみごとにもろく、がたがたと潰れていく人たち、これは宗教的素養を持ち合わせていないからです。と同時に崩れかけた時に窓口を探しても見つからないということです。全国にこれだけたくさんお寺がありますけれども、崩れかけた時に門戸を開いて待っていてくれているお寺ははっきり言って一ヶ寺もないということです。情報を提供してくれないということです。そうしますと、そういうふうなすべを提示する、つまり今必要なのは新しいニューメディアを使つての教化という切り口から考えた時には、これはひとえにそれに適したソフトをとにかく作らなくちゃいけないということです。ごさいます。

先程もちよつと申しましたけれども、このビジネスマン世代には厄介な特性があるわけです。物事を批判的に見る習性は確実についております。ですから若い人たちなら音とり

リズムだけで、体からすうっと入って行って、気がついたらそれが宗教的イベントだった、そしてそのうちに宗教的な興奮の状態に導いて行って、その中に熱中出来るという、つまり体で感じとる素質、能力を今の日本の若い人たちは持っておられます。元来東洋人は総じてこういう物事のとらえ方は下手です。私は世界中、随分あちこち絵を画きに走り回ったんですが、東洋でリズムから物事にすっと突入できる人種というのは、フィリピン人だけのです。フィリピンの人というのは、まず体からリズムですっと入っていきます。しかしそれ以外の東洋人というのは、どうも音とリズムから思考へ入り込んでいくのは何か苦手な感じがします。フィリピンの人たちはスペインの影響が非常に強いですから当然なのかもしれません。ラテンの人たちのリズム感というのは、やはり日本人にはどうも無理をしないとついていけないという感じですが、今日本の若い人たちは、非常にそういう体から入っていくという能力を身につけているようです。

けれども四十代、五十代、六十代初頭のビジネスマンは、これを嫌います。出来っこのから。無理しなきゃならないから。ですからこっちから取り込むのは無理です。

それではフィーリングを非常に重要視したイベント教化ではどうかと言いますと、このイベント教化で非常に古くからやっていて成功しているのは、「クリスチャン・クルセイ

ド」というものです。見事な雰囲気を作り出して、「さあみなさん、どうぞ壇上へ」ともっていきます。何ということなしに参加しますと、ふわっとお尻が上がって、ふわふわと壇上へ上がって洗礼を受けるという、マジックの中へ入り込んでいきます。こういうイベントによるフィーリングを重視した教化というものも、ビジネスマン世代というのは拒絶するのです。まず参加することをおっくうがります。尻込みします。そしてその団体の中に入った時に、団体としてふわっと動いていくことに拒絶現象を起こします。「俺やめた」という感じですが。なかなか右へ習え、すうっといかない世代とも言えます。したがってこういうイベントによる教化というものもちよっと難しいわけです。

### ビデオを用いた教化

それでは残るのは何でしょう。これは自分サイズで、自分の価値判断で、自分の好き勝手に取り組めるものでなければ、ビジネスマン世代へ教化で切り込むことはどうも難しいということなのです。では自分サイド、自分サイズで切り込んでいくにはどうしたらいいでしょう。そこで一番適しているのがビデオというものだと思います。非常に安易ですけ

れどもこのビデオというものの力の強さ、映像が持つ力の強さです。明らかに言葉を上回ります。このビデオというのは、一人一人が自分の空間の中で、自分の空いた時間に自分の見たい分だけ取捨選択をして見れるわけです。嫌ならやめればいいわけです。つまりビジネスマン世代の人たちにとって、一番無理なく受け入れてもらえるものなのです。

ただし先程から申してますように、非常に批判的な精神というものが旺盛ですから、導入がまず素晴らしい、最終がどんなに素晴らしいものでありましても見てはくれません。う見た途端に結論もプロセスも「こんなとくだろうな」とわかるようなものは、十秒と見ただけだけないということ。そういう意味でそのビデオを作るには大変な作業が必要なのです。各教団、新しい宗教も含めまして、いろんな教団からいろんなビデオがもたらん出ております。しかし我々が見て「これはすごい」と言えるものは本当に少ないです。先程言いましたように、胡散臭くてもう見ていられない、「どうせこういう結論なんでしょう」と、もう答えが分かかってしまうビデオが殆どです。いわばしらけてしまうビデオということ。オ

ところがこれからはそれも言っていられない、各宗教、各教団がやはり真剣にこのビデ

オというものに取り組んできております。そのためのプロをどんどんと養成をしてきていくということでございます。

実はこのビデオというのも恐ろしい落とし穴があります。先程解說的な教化、習俗、習慣を説明する知識としての教化はビジネスマン世代には往々にして拒絶されますよと申しましたけれども、ビデオでは一番手っ取り早いからそういうことになったんでしようが、解説のためのビデオは非常にたくさん出ております。これが例えば能化の為に、つまり教化者の為に作られたものであるならば広がる地域も、目的も非常にはっきりしておりますので、あまり弊害は出てこないのです。しかしこれが教化に使うために、檀信徒の方々をはじめ一般の方々のところへ、一般の社会へ映像として飛び出していくタイプのビデオが作られてきますと、これはよほど慎重にとりかからないと落とし穴が待っているということなのです。どういうことかと申しますと、四十代から五十代、六十代の方々、特に五、六十代の方々ならご理解いただけると思うのですが、かつて手で書いた文字ならば何となく信用出来ないけれども、活字になった途端に本物らしく見えてくるということがございます。この迷信はワープロが発達することによってふっとびました。けれどもそれまで例えば嘘くさいことであっても活字になると、何かそれが真実らしく見えてくる、実はその現象

がビデオで現在起こっているのです。ビデオでもって、つまり映像で目の前に揭示をされますと、それがどんな嘘くさいものであっても、ある一定のハイレベルを保ちますと、真実になってくるのです。ということはそこで解說的な習俗、習慣、そういうものをビデオで一般の方々、あるいは檀信徒の方々に広めようとしますと、そのビデオに描かれてないことは、つまり映像で出てこなかったことは、全部嘘、その映像で、ビデオを通じて見せられたことだけが真実という、映像の一人歩きが始まるのです。これはかつての活字と同じ恐ろしさだと思ふのです。絶えずこういう映像というものは危険性が裏に潜んでいるということを考えて作りませんと、宗教的にある一定の深みを持った内容のもの、あるいは密教で言いますと秘儀に該当するようなもの、こういうたものをビデオで広げますと、単なる一つの情報としてそれが勝手に走って行ってしまいます。これはやっぱり宗教の自害作用と言いますか、自分で自分の首を絞めていることになると思ふのです。

ですから教化という形で取り組むならば、解說的なものは目的を非常にはっきりさせてその流布する先の限定をすべきだということです。そしてもし教化にこれを取り組むのであるならば、本当のプロの手で、ハイレベルのものを作らないことには説得力を持たない、特にビジネスマン世代の時間をお金で換算出来る人たち、「この五分いくらだ」、「こ



の十分いくらだ」という形で時間をとらえるような人たちに、宗教に興味を持たせ、お念仏の素晴らしさを伝えようなどということは大体無理なのです。無理なことをしようとするれば、彼等の常識を上回るレベルを提示しなければいけないということになるのです。と同時に先程言いました、落し穴があるわけですから、映像だけが一人歩きをはじめる可能性があるわけです。教化者はそういう映像によって教化をした時には、見せっぱなしではこれは罪を作ります。必ず後、教化者自体の肉声のフォローが必要になってくるわけです。これを怠って映像だけを配布して、「さあごらんなさい、どうぞ」とやってみましたら、自分の首を絞めていくことになりますよということでございます。

今言いました、映像というものの持つインパクトの強さ、あるいはこのレベルの高さ、これを維持し、なおかつ先程申しました時間的制約、簡単に言いますと、「だれちゃだめですよ、しらせさせたらおしまいですよ」ということが大事なのです。非常に要領よくまとめられたコンパクトな時間の中でそれが行なわれなければ効果はないということです。だからだと長くなってきたら、決してビデオの前に座っていてはもらえないということでございます。そういったことを考えながらこのビデオというものに取り組んでいきましたら、当然これは個人の力で作れるものではないということでございます。個人の努力だけ

ではとても作れるものではないということです。

## 浄土宗の組織を活かす

確かに今日の情報化社会の中ではこの末端の寺院、一ヶ寺一ヶ寺がこれはまず情報の発進基地でなければならぬと思います。あらゆる情報はその末端のお寺から発進されてくるといふ、その基地としての役目をお寺が持っているかないと、これからの情報化社会といふものは、これは間違いなくとり残されていくと思うのですけれども、しかし一つのお寺で全てのメニューを揃えるなんてことは、これも不可能なことでございます。出来るわけがございません。とすれば、例えば浄土宗の場合、浄土宗という組織があるわけですから、それを活かしてゆくことを考えなければならぬと思います。

そうしますと住職一人一人の得手不得手がございますので、喋るのが上手な人もあれば、どうも喋ることは苦手だという方もあるわけですし、しかし文章なら書けるよという人もあるだろうし、テクノロジーは任せてくれという方もあるでしょうし、その住職、個々の得手を活かして、各お寺が一つ一つメニューを揃えていけば情報発進基地としての

メニューが出来るわけです。もし浄土宗というものが組織であるならばそのメニューを統括して、「この寺にはこういうメニューがございます」、「あちらの寺に行けばこういうメニューがございます」、逆に「こんなものはないでしょうか?」と言われた時に、「はい、ではこの寺に行きなさい、こういうメニューを揃えておりますよ」というコントロールの役目、それは浄土宗全国のお寺で、「たいていのメニューは全部揃いますよ」というぐらいの熱意と言いますが、エネルギーと言いますが、取りかからないことにはまず情報化社会の中で生き残っていくことは無理だと思います。

もちろん習俗として、お付き合いとして檀信徒の方々はお寺とお付き合いはしてください。非常に日本人というのは義理がたいですから。何もお葬式だけでつながらなくても、お寺で彼岸の法要をやる、法話の会をやる、ちゃんと足を運んでいただけます。しかしそれで本当に教化と言えるのか、本当にその人たちを満足させられているのか、その人たちの求めているものをお寺は提供してきたのか、現状は一向に検証がなされておりません。

そうしますと今度は檀信徒の方から選択肢の一つとして、お寺をとらえられるような時代になってまいりますと、「どうもうちのお寺はろくな情報を発進してくれないので、

あっちのお寺の方が良さそうだな」あるいは、「向こうの宗派の方がもっと身近なことをやってくれるな」というようなことで、どんどんと移り変わっていくという事態が日本でも起こりうるのです。いくら義理がたい日本人と言えども、そうそういつまでもお付き合いが続くとは限らないということです。

そういう意味で新しいメディアというものも、積極的に取り入れていく、そういう姿勢と言いますか、そういったものが教団として取り組んでいただけたら、そこに組織としての力というものが出てくるのではないかと思います。でなければ正直言いました組織なんて要りません。コントロールしてくれなくては、自分のところで本当の末端の一寺院が、どんなに努力をしても力は限られているのですから。

そうしますとお寺同士の中で、こんなことを言うとな怒られるかもしれませんが、大阪の例で申しますと、寺町というのがありますが、隣の寺で何をやっていて、何を考えているのかも、何にも知らないで生きていけるのです。檀信徒というものをしっかり持っているればお寺というものは潰れません。どんなに馬鹿なことをしていたって、住職を弾劾するようなことは起こってまいりません。これは日本人のまろやかさでございます。お付き合いの良さでございます。決して信仰だけではないということです。そういう意味で各お

寺がメニューを揃えていった時に、一宗という組織がそれをコントロールして情報網を揃えてやっていくという姿勢ぐらいは欲しいと思うわけでございます。本当はとくにそれに取りかかっていただかなく困るわけですが、そうではないということ、「21の会」のメンバーが、その辺のやりきれなさと言いますか、はがゆさと言いますか、じっとしてられないということが集まって出来ているわけですので、正直言いますと、一匹狼が多いのであります、恐い会なのです。けれども、その代わり言いたいことも言えるという形で今進めておりますが、まだまだもちろん力不足で、自力でそういったものを作りかかっているのですが、なかなか出来ないわけです。ただ現実には先程申しました、正確な情報が欲しいという要求に対して、せめて正確らしき情報を各お寺が、あるいは一宗が提示しなければ、どんなメディアを使おうとも所詮新しいものがない、玩具使いで終わってしまうということ。ただ生きている本物の仏教と言いますか、そういったことを今の言葉で語りかけない限り、ビジネスマン世代には到底受け入れてはもらえないというのが、実はこれまで「21の会」でいろいろ討議をしてまいりました中の、一つの答えでございます。

その辺で新しいメディアを使った切り口からビジネスマン世代に近づく、決して近道と

は申しませんが、道は作れるのではないかという提案で、本日私のお話を終わらせていた  
だきたいと思えます。

## あとがき

本集は、浄土宗総合研究所布教研究部の平成三年度の定例研究会の講演をまとめたものである。

テーマを「現代教化の視点——各世代に焦点をあてて——」としたのは、教化の方法論を目指したからである。

何を伝えるのか、どの様に伝えるのか、このことが教化の課題である。言葉をかえれば、理念とその方法である。このことについては、これまで多くの業績が重ねられてきた。

理念は、伝統にささえられた教学に示されている。教化・布教の課題は、浄土宗の教えをどの様に伝えるか、という方法を問うことにあるのではないだろうか。

何時の時代にあっても人間の情況は苦しみに満ちている。その苦しみは普遍的なものあれば、時代が生み出すものもある。人間は常に人間であるとともに、新しい状態に生きなければならぬ存在でもある。そこに一様でない人間の問題があるのである。

時機相応の意味もそこにある。つねに、人間の情況を見つめ、そこに現れた苦難の様相

を探り、それに対応した教化が求められるのではないだろうか。

人々が救済を求める状況は必ずしも一様ではない。子供には子供の、青年には青年の、壮年には壮年の、高齢者には高齢者の悩み、苦しみの状況が考えられる。こうした世代別の宗教的欲求をとらえ、それに対応した教化方法が少しでも明らかになれば、と考えて企画した。

第一回は平成三年六月二六日にブラジルの開教に従事され、女子教育を行ってこられた大乗淑徳学園理事長長谷川良昭先生に「青年の教化——教育の現場から——」のタイトルのもとにご講演をいただいた。

第二回は、同年九月三十日に東京大学教授・東蓮寺副住職の大村彰道先生にご専門の心理学の立場から「思春期の心理と宗教の役割」のご講演をいただいた。

第三回は、同年十一月二八日に会場を京都四条センターに移して、仏教大学助教授の場知賀礼文先生に社会学の立場から「女性と宗教」のご講演をいただいた。

第四回は、平成四年一月二七日に西蓮院住職・教化情報センター21の会代表の飯田順雅先生に「現代人教化の可能性——ビジネスマン世代に向けて——」のご講演をいただいた。



現代教化の視点

布教資料 第6集

平成4年3月31日

編集・発行 浄土宗総合研究所

〒105 東京都港区芝公園4-7-4

明照会館内 TEL 03-5472-6571

FAX 03-3438-4033

印刷 ヨシダ印刷株式会社





